

遠野物語

柳田国男



この書を外国に在る人々に呈す

この話はすべて遠野とのおの人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月ごろより始めて夜分おりおり訪ね来たりこの話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手にはあらざれども誠実なる人なり。自分もまた一字一句をも加減かげんせず感じたままを書きたり。思うに遠野郷とようにはこの類の物語なお数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野よりさらに物深き所にはまた無数の山神山人の伝説あるべし。願わくはこれを語りて平地人を戦慄せしめよ。この書のごときは陳勝吳広ちんしょうごうのみ。

昨年八月の末自分は遠野郷に遊びたり。花巻はなまきより十余里の路上には町場三ヶ所あり。その他はただ青き山と原野なり。人煙の稀少きせうなること北海道石狩いしかりの平野よりも甚だし。或いは新道なるが故に民居の来たり就ける者少なきか。遠野の城下はすなわち煙花の街なり。馬を馱亭の主人に借りて独り郊外の村々を巡りたり。その馬は黔くろき海草をもつて作りたる厚総あつぶさを掛けたり。蛇多あづきためなり。猿さるヶ石の溪谷は土肥こえてよく拓ひらけたり。路傍に石塔の多きこと諸国その比を知らず。高処より展望すれば早稲わせまさに熟し晩稻ばんとうは花盛はなざかりにて水はことごとく落ちて川にあり。稲の色合いろあいは種類によりてさまざまなり。三つ四つ五つの田を続けて稲の色と同じきはすなわち一家に属する田にしていわゆる名処みやうしよの同じきなるべし。小字こあざよりさらに小さき区域

の地名は持主にあらざればこれを知らず。古き売買譲与の証文には常に見ゆる所なり。附馬牛つくもうしの谷へ越ゆれば早池峯はやちねの山は淡く霞み山の形は菅笠すががさのごとくまた片仮名かたかなのへの字に似たり。この谷は稲熟することさらに遅く満目一色に青し。細き田中の道を行けば名を知らぬ鳥ありて雛ひなを連れて横ぎりたり。雛の色は黒に白き羽まじりたり。始めは小さき鶏かと思ひしが溝みぞの草に隠れて見えざればすなわち野鳥なることを知れり。天神の山には祭ありて獅子踊ししおどりあり。ここにのみは軽く塵ちりたち紅あかき物いささかひらめきて一村の緑に映じたり。獅子踊というは鹿しかの舞まいなり。鹿の角つのをつけたる面かぶを被り童子五六人剣を抜きてこれとともに舞うなり。笛の調子高く歌は低くして側かたわらにあれども聞きがたし。日は傾きて風吹き酔いて人呼ぶ者の声も淋さびしく女は笑い児こは走れどもなお旅愁をいかんともする能あたわざりき。孟蘭盆うらぼんに新しき仏ある家は紅白の旗を高く揚あげて魂たましいを招く風あり。峠とうげの馬上において東西を指点するにこの旗十数所あり。村人の永住の地を去らんとする者とかりそめに入りこみたる旅人とまたかの悠々ゆうゆうたる靈山とを黄昏たそがれは徐おもむろに來たりて包容し尽したり。遠野郷には八ヶ所の観音堂あり。一木をもつて作りしなり。この日報賽ほうさいの徒多く岡の上に灯火見え伏鉦ふせがねの音聞えたり。道ちがえの叢くさむらの中には雨風祭の藁人形あり。あたかもくたびれたる人のごとく仰臥ぎょふがしてありたり。以上は自分が遠野郷にてえたる印象なり。

思うにこの類の書物は少なくも現代の流行にあらず。いかに印刷が容易なればとて

こんな本を出版し自己の狭隘きようあいなる趣味をもつて他人に強いんとするは無作法ぶさほうの仕業しわざなりという人あらん。されどあえて答う。かかる話を聞きかかる処ところを見てきてのちこれを人に語りたがらざる者果はたしてありや。そのような沈黙ちんもくにしてかつ慎重つしみ深き人は少なくとも自分の友人の中にはあることなし。いわんやわが九百年前の先輩せんぱい『今昔物語』のごときはその当時にありてすでに今は昔の話なりしに反しこれはこれ目前の出来事なり。たとえ敬虔けいけんの意と誠実の態度とにおいてはあえて彼を凌ぐことを得という能わざらんも人の耳を経ふること多からず人の口と筆とを備やといたること甚だ僅わずかなりし点においては彼の淡泊無邪気なる大納言殿だいなごんのかえつて来たり聴くに値せり。近代の御伽百物語の徒おとぎひやくものがたりに至りてはその志こころざしやすでに陋ろうかつ決してその談の妄誕もうたんにあらざることを誓ひそいえず。窃ひそかにもつてこれと隣を比するを恥とせり。要するにこの書は現在の事実なり。単にこれのみをもつてするも立派なる存在理由ありと信ず。ただ鏡石子は年わずかに二十四五自分もこれに十歳長ずるのみ。今の事業多き時代に生まれながら問題の大小をも弁わきまえず、その力を用いるところ当とうを失えりという人あらば如何いかに。明神の山みみずくの木兎のごとくあまりにその耳を尖とがらしあまりにその眼を丸くし過ぎたりと責せむる人あらば如何。はて是非もなし。この責任のみは自分が負わねばならぬなり。

おきなさび飛ばず鳴かざるをちかたの森のふくろふ笑ふらんかも

題目（下の数字は話の番号なり、ページ数にはあらず）

地勢

一、五、六七、一一一

神の始

二、六九、七四

里の神

九八

カクラサマ

七二―七四

ゴンゲサマ

一一〇

家の神

一六

オクナイサマ

一四、一五、七〇

オシラサマ

六九

ザシキワラシ

一七、一八

山の神

神女

八九、九一、九三、一〇二、一〇七、一〇八

天狗

二七、五四

山男

二九、六二、九〇

山女

五、六、七、九、二八、三〇、三一、九二

山の靈異

三、四、三四、三五、七五

三二、三三、六一、九五

仙天堂

四九

蝦夷の跡

一一二

塚と森と

六六、一一一、一一三、一一四

姥神^{うば}

六五、七一

館^{たて}の址

六七、六八、七六

昔の人

家のさま

八、一〇、一一、一二、二一、二六、八四

家の盛衰

八〇、八三

マヨイガ

一三、一八、一九、二四、二五、三八、六三

前兆

六三、六四

魂の行方

二〇、五二、七八、九六

二三、八六―八八、九五、九七、九九、一〇〇

まぼろし

二三、七七、七九、八一、八二

雪女

一〇三

川童

五五―五九

猿の経立ふつたち

四五、四六

猿

四七、四八

狼おいぬ

熊

三六―四二

狐

四三

色々の鳥

六〇、九四、一〇一

花

五一―五三

小正月の行事

三三、五〇

一四、一〇二―一〇五

雨風祭

一〇九

昔々

一一五—一一八

歌謡

一一九

三

一 遠野郷とおのこうは今の陸中上閉伊郡かみへいの西の半分、山々にて取り囲かこまれたる平地なり。
 新町村しんちやうそんにては、遠野、土淵つちぶち、附馬牛つくもうし、松崎、青笹あおざさ、上郷かみこう、小友おとも、綾織あやおり、鱒沢ますざわ、宮守みやもり、
 達會部たつそべの一町十ヶ村に分かつ。近代或いは西閉伊郡とも称し、中古にはまた遠野保とおのほ
 とも呼べり。今日郡役所のある遠野町はすなわち一郷の町場にして、南部家なんぶけ一万石
 の城下なり。城を横田城よこたじやうともいう。この地へ行くには花巻の停車場にて汽車を下り、
 北上川を渡り、その川の支流猿ヶ石川さるがわの溪たにを伝つたいて、東の方へ入ること十三里、遠
 野の町に至る。山奥には珍しき繁華の地なり。伝つたえいう、遠野郷の地大昔はすべて
 一円の湖水なりしに、その水猿ヶ石川となりて人界に流れ出でしより、自然にかく
 のごとき邑落ゆうつくをなせしなりと。されば谷川のこの猿ヶ石に落合うもの甚だ多く、俗
 にななないややささき
 に七内八崎ありと称す。内は沢ないまたは谷のことにて、奥州の地名には多くあり。

○遠野郷のトーはもとアイヌ語の湖という語より出でたるなるべし、ナイもア
 イヌ語なり。

二 遠野の町は南北の川の落合おちあひにあり。以前は七十里しちしちじゆうりとて、七つの溪谷おのおの
 七十里の奥より売買ばいばいの貨物あつを聚め、その市の日は馬千匹、人千人の賑にぎわしきなりき。
 四方の山々の中に最も秀ひいでたるを早池峯はやちねという、北の方附馬牛の奥にあり。東の方

には六角牛山立てり。石神いしがみという山は附馬牛と達會部との間にありて、その高さ前の二つよりも劣れり。大昔に女神あり、三人の娘を伴ともないてこの高原に來たり、今の來内村らいないの伊豆權現いずこんげんの社あるところに宿やどりし夜、今夜よき夢を見たらん娘によき山を与たまうべしと母の神の語りて寝たりしに、夜深く天より靈華れいか降りて姉の姫ひめの胸の上に止りしを、末の姫眼めさ覺めめて窃ひそかにこれを取り、わが胸の上に載せたりしかば、ついに最も美しき早池峯の山を得、姉たちは六角牛と石神とを得たり。若き三人の女神のおの三の山に住し今もこれを領したもう故に、遠野の女どもはその妬ねたみを畏おそれて今もこの山には遊ばずといえり。

○この一里は小道すなわち坂東道なり、一里が五丁または六丁なり。

○タツソベもアイヌ語なるべし。岩手郡玉山村にも同じ大字あり。

○上郷村大字來内、ライナイもアイヌ語にてライは死のことナイは沢なり、水の静かなるよりの名か。

三 山々の奥には山人住めり。栃内村とちない和野わのの佐々木嘉兵衛かへえという人は今も七十余にて生存せり。この翁おきな若かりしころ獵をして山奥に入りしに、遙はるかなる岩の上に美しき女一人ありて、長き黒髪くしけずを梳くりていたり。顔の色きわめて白し。不敵の男なれば直ただちに銃つつを差し向けて打ち放せしに弾たまに應じて倒れたり。そこに馳かけつけて見れば、

身のたけ高き女にて、解きたる黒髪はまたそのたけよりも長かりき。のちの駿にせばやと思ひてその髪をいささか切り取り、これを縮ねて懷に入れ、やがて家路に向いしに、道の程にて耐えがたく睡眠を催しければ、しばらく物蔭に立寄りてまどろみたり。その間夢と現との境のようなる時に、これも丈の高き男一人近よりて懷中に手を差し入れ、かの縮ねたる黒髪を取り返し立ち去ると見ればたちまち睡は覺めたり。山男なるべしといえり。

○土淵村大字栃内。

四 山口村の吉兵衛という家の主人、根子立という山に入り、笹を蒔りて束となし担ぎて立上らんとする時、笹原の上を風の吹き渡るに心づきて見れば、奥の方なる林の中より若き女の穉児を負いたるが笹原の上を歩みて此方へ来るなり。きわめてあでやかなる女にて、これも長き黒髪を垂れたり。児を結いつけたる紐は藤の蔓にて、着たる衣類は世の常の縞物なれど、裾のあたりぼろぼろに破れたるを、いろいろの木の葉などを添えて綴りたり。足は地に着くとも覺えず。事もなげに此方に近より、男のすぐ前を通りて何方へか行き過ぎたり。この人はその折の怖ろしさより煩い始めて、久しく病みてありしが、近きころ亡せたり。

○土淵村大字山口、吉兵衛は代々の通称なればこの主人もまた吉兵衛ならん。

五

遠野郷より海岸の田ノ浜、吉利吉里などへ越ゆるには、昔より笛吹峠という

山路あり。山口村より六角牛の方へ入り路のりも近かりしかど、近年この峠を越ゆる者、山中にて必ず山男山女に出逢うより、誰もみな怖ろしがりて次第に往来も稀になりしかば、ついに別の路を境木峠という方に開き、和山を馬次場として今は此方ばかりを越ゆるようになれり。二里以上の迂路なり。

○山口は六角牛に登る山口なれば村の名となれるなり。

六

遠野郷にては豪農のことを今でも長者という。青笹村大字糠前の長者の娘、ふ

と物に取り隠されて年久しくなりしに、同じ村の何某という獵師、或る日山に入りて一人の女に遭う。怖ろしくなりてこれを撃たんとせしに、何おじではないか、ぶつなという。驚きてよく見れば彼の長者がまな娘なり。何故にこんな処にはおるぞと問えば、或る物に取られて今はその妻となれり。子もあまた生みたれど、すべて夫が食い尽して一人此のごとくあり。おのれはこの地に一生涯を送ることなるべし。人にも言うな。御身も危うければ疾く帰れというままに、その在所をも問い明らめずして遁げ還れりという。

○糠の前は糠の森の前にある村なり、糠の森は諸国の糠塚と同じ。遠野郷にも糠森・糠塚多くあり。

七 上郷村の民家の娘、栗を拾いに山に入りたるまま帰り来たらず。家の者は死したるならんと思ひ、女のしたる枕を形代として葬式を執行い、さて二三年を過ぎたり。しかるにその村の者獵をして五葉山の腰のあたりに入りしに、大なる岩の蔽いかかりて岩窟のようになれるところにて、図らずこの女に逢いたり。互いに打ち驚き、いかにしてかかる山にはおるかと思へば、女の曰く、山に入りて恐ろしき人になり。その人はいかなる人かと問うに、自分には並の人間と見ゆれど、ただ丈きわめて高く眼の色少し凄しと思はる。子供も幾人か生みたれど、我に似ざれば我子にはあらずといいて食うにや殺すにや、みないずれへか持ち去りてしまふなりという。まことに我々と同じ人間かと押し返して問へば、衣類なども世の常なれど、ただ眼の色少しちがえり。一市間に一度か二度、同じようなる人四五人集まりきて、何事か話をなし、やがて何方へか出て行くなり。食物など外より持ち来たるを見れば町へも出ることはない。かく言ううちにも今にそこへ帰つて来るかも知れずという故、獵師も怖ろしくなりて帰りたりといえり。二十年ばかりも以前のことがと思はる。

○一市間は遠野の町の市の日と次の市の日の間なり。月六度の市なれば一市間はすなわち五日のことなり。

八

黄昏たそがれに女や子供の家の外に出ている者はよく神隠かみかくしにあうことは他の国々と同じ。

松崎村の寒戸さむとというところの民家にて、若き娘梨なしの樹きの下に草履ぞうりを脱ぎ置きたるまま行方ゆくえを知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或る日親類知音の人々その家あつに集まりてありしところへ、きわめて老いさらばいてその女歸り来たれり。いかにして歸つて来たかと問えば人々に逢いたかりし故歸りしなり。さらばまた行かんとて、再び跡あとを留めず行き失うせたり。その日は風の烈はげしく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒さわがしき日には、きようはサムトの婆ばばが歸つて来そうなりという。

九

菊池弥之助やのすけという老人は若きころ駄賃だちんを業とせり。笛の名人にて夜通よどおしに馬を

追いて行く時などは、よく笛を吹きながら行きたり。ある薄月夜うすづきよに、あまたの仲間おおよちの者とともに浜へ越ゆる境木峠を行くとて、また笛を取り出して吹きすさみつつ、大谷地おおやちというところの上を過ぎたり。大谷地は深き谷にて白樺しろかんばの林しげく、その下は葦あしなど生じ湿しめりたる沢なり。この時谷の底より何者か高き声にて面白いぞーと呼よばわる者あり。一同ことごとく色を失い遁げ走りたりといえり。

○ヤチはアイヌ語にて湿地の義なり、内地に多くある地名なり。またヤツともヤトともヤともいう。

一〇 この男ある奥山に入り、茸きのこを採るとて小屋を掛け宿りてありしに、深夜に遠きところにてきやーという女の叫び声聞え胸を轟とどろかしたることあり。里へ歸りて見れば、その同じ夜、時も同じ刻限に、自分の妹なる女その息子のために殺されてありき。

一一 この女というは母一人子一人の家なりしに、嫁よめと姑しゅうととの仲悪あしくなり、嫁はしばしば親里へ行きて歸り来きざることあり。その日は嫁は家にありて打ち臥ふしておりしに、昼のころになり突然と倅せがれのいうには、ガガはとても生いかしては置かれぬ、今日はきつと殺すべしとて、大なる草薙鎌くさかりがまを取り出し、ごしごしと磨とぎ始めたり。そのありさまさらに戯言たわむれごととも見えざれば、母はさまざまに事を分わけて詫わびたれども少しも聴かず。嫁も起き出いでて泣きながら諫いさめたれど、露つゆ従したがう色もなく、やがて母が遁のがれ出でんとする様子ようすあるを見て、前後の戸口をことごとく鎖とぎしたり。便用に行きたしといえ、おのれみずから外より便器を持ち来たりてこれへせよという。夕方にもなりしかば母もついにあきらめて、大なる囲炉裡いろりの側かたわらにうずくまりただ泣きでいたり。倅せがれはよくよく磨とぎたる大鎌を手にして近より来たり、まず左の肩口を目がけて薙なぐようにすれば、鎌の刃先はさきろの上の火棚ひだなに引ひつかかりてよく斬きれず。その

時に母は深山の奥にて弥之助が聞きつけしようなる叫び声を立てたり。二度目には右の肩より切り下げたるが、これにてもなお死絶えずしてあるところへ、里人ら驚きて馳せつけ倅を取り抑え直に警察官を呼び渡したり。警官がまだ棒を持ちてある時代のことなり。母親は男が捕えられ引き立てられて行くを見て、滝のように血の流るる中より、おのれは恨も抱かずに死ぬるなれば、孫四郎は宥したまわれという。これを聞きて心を動かさぬ者はなかりき。孫四郎は途中にてもその鎌を振り上げて巡査を追い廻しなどせしが、狂人なりとて放免せられて家に帰り、今も生きて里にあり。

○ガガは方言にて母ということなり。

一一一 土淵村山口に新田乙蔵という老人あり。村の人は乙爺という。今は九十に近く病みてまさに死なんとす。年頃遠野郷の昔の話をよく知りて、誰かに話して聞かせ置きたしと口癖のようにならねど、あまり臭ければ立ち寄りて聞かんとする人なし。処々の館の主の伝記、家々の盛衰、昔よりこの郷に行われし歌の数々を始めとして、深山の伝説またはその奥に住める人々の物語など、この老人最もよく知れり。

○惜むべし、乙爺は明治四十二年の夏の始めになくなりたり。

一二 この老人は数十年の間山の中に独りにて住みし人なり。よき家柄なれど、若きころ財産を傾け失いてより、世の中に思いを絶ち、峠の上に小屋を掛け、甘酒を往來の人に売って活計とす。駄賃の徒はこの翁を父親のように思いて、親しみた。少しく収入の余あれば、町に下りきて酒を飲む。赤毛布にて作りたる半纏を着て、赤き頭巾を被り、酔えば、町の中を躍りて歸るに巡査もとがめず。いよいよ老衰して後、旧里に歸りあわれなる暮しをなせり。子供はすべて北海道へ行き、翁ただ一人なり。

一四 部落には必ず一戸の旧家ありて、オクナイサマという神を祀る。その家は大洞という。この神の像は桑の木を削りて顔を描き、四角なる布の真中に穴を明け、これを上より通して衣裳とす。正月の十五日には小字中の人々この家に集まり来たりてこれを祭る。またオシラサマという神あり。この神の像もまた同じようにして造り設け、これも正月の十五日に里人集まりてこれを祭る。その式には白粉を神像の顔に塗ることあり。大同の家には必ず畳一帖の室あり。この部屋にて夜寝る者はいつも不思議に遭う。枕を反すなどは常のことなり。或いは誰かに抱き起こされ、または室より突き出さるることもあり。およそ静かに眠ることを許さぬなり。

○オシラサマは双神なり。アイヌの中にもこの神あること『蝦夷風俗彙聞』に

見ゆ。

○羽後苧和野の町にて市の神の神体なる陰陽の神に正月十五日白粉を塗りて祭ることあり。これと似たる例なり。

一五 オクナイサマを祭れば幸多し。土淵村大字柏崎の長者阿部氏、村にては

田圃の家という。この家にて或る年田植の人手足らず、明日は空も怪しきに、わづ

かばかりの田を植え残すことかなどつぶやきてありしに、ふと何方よりもなく丈

低き小僧一人来たりて、おのれも手伝い申さんというに任せて働かせて置きしに、

午飯時に飯を食わせんとて尋ねたれど見えず。やがて再び帰りきて終日、代を掻き

よく働きてくれしかば、その日に植えはてたり。どこの人かは知らぬが、晩にはきて

物を食いたまへと誘いしが、日暮れてまたその影見えず。家に歸りて見れば、縁側

に小さき泥の足跡あまたありて、だんだんに座敷に入り、オクナイサマの神棚のと

ころに止りてありしかば、さてはと思ひてその扉を開き見れば、神像の腰より下は

田の泥にまみれていませし由。

一六 コンセサマを祭れる家も少なからず。この神の神体はオコマサマとよく似

たり。オコマサマの社は里に多くあり。石または木にて男の物を作りて捧ぐるなり。

今はおいおいとその事少なくなれり。

一七 旧家にはザシキワラシという神の住みたもう家少なからず。この神は多く

は十二三ばかりの童児なり。おりおり人に姿を見することあり。土淵村大字飯豊の今淵勘十郎という人の家にては、近きころ高等女学校にいる娘の休暇にて帰りてありしが、或る日廊下にてはたとザシキワラシに行き逢い大いに驚きしことあり。これは正しく男の児なりき。同じ村山口なる佐々木氏にては、母人ひとり縫物しておりしに、次の間にて紙のがさがさという音あり。この室は家の主人の部屋にて、その時は東京に行き不在の折なれば、怪しと思ひて板戸を開き見るに何の影もなし。しばらくの間、坐りて居ればやがてまた頻に鼻を鳴らす音あり。さては座敷ワラシなりけりと思へり。この家にも座敷ワラシ住めりということ、久しき以前よりの沙汰なりき。この神の宿りたもう家は富貴自在なりということなり。

○ザシキワラシは座敷童衆なり。この神のこと『石神問答』中にも記事あり。

一八 ザシキワラシまた女の児なることあり。同じ山口なる旧家にて山口孫左衛門という家には、童女の神二人いませりということを久しく言い伝えたりしが、或る年同じ村の何某という男、町より帰るとて留場の橋のほとりにて見馴れざる二人のよき娘に逢えり。物思わしき様子にて此方へ来たる。お前たちはどこから来たと問えば、おら山口の孫左衛門がところからきたと答う。これから何処へ行くのかと聞けば、その村の何某が家にと答う。その何某はやや離れたる村にて、今も立派

に暮せる豪農なり。さては孫左衛門が世も末だなど思いしが、それより久しからずして、この家の主従二十幾人、茸きのこの毒あたに中りて一日のうちに死に絶え、七歳の女の子一人を残せしが、その女もまた年老いて子なく、近きころ病やみて失せたり。

一九 孫左衛門が家にては、或る日梨なしの木めぐりに見馴みなれぬ茸きのこのあまた生えたるを、食わんか食うまじきかと男どもの評議してあるを聞きて、最後の代の孫左衛門、食わぬがよしと制したれども、下男みずおの一人がいうには、いかなる茸にても水桶の中に入れて芋おがら殻をもつてよくかき廻まわしてのち食えば決して中あたることなしとて、一同この言に従い家内ことごとくこれを食べたり。七歳の女の児こはその日外に出でて遊びに氣を取られ、昼飯を食いに帰ることを忘れしたために助かりたり。不意の主人の死去にて人々の動転してある間に、遠き近き親類の人々、或いは生前に貸かありといい、或いは約束ありと称して、家の貨財は味噌みその類たぐいまでも取り去りしかば、この村草分くさわけの長者なりしかども、一朝にして跡方あとかたもなくなりたり。

二〇 この兇變の前にはいろいろの前兆ありき。男ども苳かりお置きたる秣まぐさを出すとして三ッ齒くわの鋤くわにて掻かきまわせしに、大なる蛇へびを見出みいだしたり。これも殺すなど主人が制せしをも聴かずして打ち殺したりしに、その跡より秣の下にいくらともなき蛇ありて、うごめき出でたるを、男ども面白半分おもしろ半分にことごとくこれを殺したり。さて取り捨すつべきところもなければ、屋敷ととの外そとに穴を掘りてこれを埋うめ、蛇塚を作る。その

蛇は簀あじかに何荷なんがともなくありたりといえり。

一一一 右の孫左衛門は村には珍しき学者にて、常に京都より和漢の書を取り寄せて読み耽ふけりたり。少し変人という方なりき。狐きつねと親しくなりて家を富ます術を得んと思ひ立ち、まず庭の中に稲荷いなりの祠ほくらを建て、自身京のぼに上りて正一位の神階かみを請うけて歸り、それよりは日々一枚の油揚あぶら揚げを欠かすことなく、手ずから社頭に供そなえて拝ををなせしに、のちには狐馴なれて近づけども遁にげず。手を延ばしてその首を抑おさえなどしたりという。村にありし薬師どくすりの堂守は、わが仏様は何ものをも供そなえざれども、孫左衛門の神様よりは御利益ごりやくありと、たびたび笑いごとにしたりとなり。

一二一 佐々木氏の曾祖母そうそぼ年よりて死去せし時、棺かんに取り納め親族の者集まりきてその夜は一同座敷にて寝たり。死者の娘にて乱心のため離縁せられたる婦人もまたその中にありき。喪もの間は火の氣けを絶たやすことを忌いむがところの風ふうなれば、祖母と母との二人のみは、大なる囲炉裡いろりの両側りようがわに坐すわり、母人は旁ははびとに炭籠すみかごを置き、おりおり炭を継つぎてありしに、ふと裏口の方より足音してくる者あるを見れば、亡なくなりし老女なり。平生腰へいせいかがみて衣物きものの裾すその引きずるを、三角に取り上げて前に縫いつけてありしが、まざまざとその通りにて、縞目しまめにも見覚えあり。あなやと思う間もなく、二人の女の坐れる炉の脇を通り行くとて、裾すそにて炭取すみとりにさわりしに、丸き炭取なればくるくるとまわりたり。母人は氣丈きじょうの人なれば振り返りあとを見送み送りりたれば、

親縁の人々の打ち臥したる座敷の方へ近より行くと、かの狂女のけたたましき声にて、おばあさんが来たと叫びたり。その余の人々はこの声に睡を覚しただ打ち驚くばかりなりしといえり。

○マーテルリンクの『侵入者』を想起こさしむ。

一二三 同じ人の二七日の速夜に、知音の者集まりて、夜更くるまで念仏を唱え立ち帰らんとする時、門口の石に腰掛けてあちらを向ける老女あり。そのうしろ付正しく亡くなりし人の通りなりき。これは数多の人見たる故に誰も疑わず。いかなる執着のありしにや、ついに知る人はなかりしなり。

二四 村々の旧家を大同というは、大同元年に甲斐国より移り来たる家なればかくいうとのことなり。大同は田村將軍征討の時代なり。甲斐は南部家の本国なり。二つの伝説を混じたるに非ざるか。

○大同は大洞かも知れず、洞とは東北にて家門または族ということなり。『常陸国志』に例あり、ホラマエという語のちに見ゆ。

二五 大同の祖先たちが、始めてこの地方に到着せしは、あたかも歳の暮にて、春のいそぎの門松を、まだ片方はえ立てぬうちに早元日になりたればとて、今もこの

家々にては吉例として門松の片方を地に伏せたるままにて、標繩しめなわを引き渡すとのことなり。

二六 柏崎たんぼの田圃たんぼのうちと称する阿倍氏はことに聞えたる旧家なり。この家の先代に彫刻たくみに巧なる人ありて、遠野一郷の神仏の像にはこの人の作りたる者多し。

二七 早池峯はやちねより出でて東北の方宮古みやこの海に流れ入る川を閉伊川へいがわという。その流域はすなわち下閉伊郡なり。遠野の町の中にて今は池の端はたという家の先代の主人、宮古に行きての帰るさ、この川の原台はらだいの淵ふちというあたりを通りしに、若き女ありて一封の手紙を托たくす。遠野の町の後なる物見山の中腹にある沼に行きて、手を叩たたけば宛名あてなのいいで来くべしとなり。この人請うけ合いはしたれども路々心みちみちに掛りてとつおいつせしに、一人の六部ろくぶに行き逢あえり。この手紙を開きよみて曰いわく、これを持ち行かば汝なんじの身に大なる災わざわいあるべし。書き換かえて取らすべしとて更に別の手紙を与えたり。これを持ちて沼に行き教えのごとく手を叩きしに、果して若き女いでて手紙を受け取り、その礼なりとてきわめて小さき石臼いしうすをくれたり。米を一粒入れて回せば下より黄金い出いづ。この宝物たからものの力にてその家やや富有になりしに、妻なる者慾深くして、一度にたくさんくほの米をつかみ入れしかば、石臼はしきりに自ら回たまりて、ついには朝ごとに主人がこの石臼に供えたりし水の、小さき窪みくぼの中に溜たまりてありし中へ滑すべり入りて見えなくなりたり。その水溜りはのちに小さき池になりて、今も家の旁かたわらにあり。

家の名を池の端というもその為なりという。

○この話に似たる物語西洋にもあり、偶合にや。

二八

始めて早池峯に山路をつけたるは、

やまみち

附馬牛村の何某という獵師にて、時は

遠野の南部家入部の後のことなり。その頃までは土地の者一人としてこの山には入りたる者なかりしと。この獵師半分ばかり道を開きて、山の半腹に仮小屋を作りておりしころ、或る日炉の上に餅をならべ焼きながら食いおりしに、小屋の外を通る者ありて頻に中を窺うさまなり。よく見れば大なる坊主なり。やがて小屋の中に入り来たり、さも珍しげに餅の焼くるを見てありしが、ついにこらえ兼ねて手をさし延べて取りて食う。獵師も恐ろしければ自らもまた取りて与えしに、嬉しげになお食いたり。餅皆になりたれば帰りぬ。次の日もまた来るならんと思い、餅によく似たる白き石を二つ三つ、餅にまじえて炉の上に載せ置きしに、焼けて火のようになり。案のごとくその坊主きようもきて、餅を取りて食うこと昨日のごとし。餅尽きてのちその白石をも同じように口に入れたりしが、大いに驚きて小屋を飛び出し姿見えずなれり。のちに谷底にてこの坊主の死してあるを見たりといえり。

○北上川の中古の大洪水に白髪水というがあり、白髪の姥を欺き餅に似たる焼

石を食わせし祟なりという。この話によく似たり。

二九

鶏頭山けいとうざんは早池峯の前面に立てる峻峯しゅんぽうなり。麓ふもとの里にてはまた前薬師まえやくしともい

う。天狗住てんぐめりとて、早池峯に登る者も決してこの山は掛けず。山口のハネトとい

う家の主人、佐々木氏の祖父と竹馬の友なり。きわめて無法者にて、鉞まさかりにて草を薙

り鎌かまにて土を掘るなど、若き時は乱暴の振舞ふるまひのみ多かりし人なり。或る時人と賭かけを

して一人にて前薬師に登りたり。帰りての物語に曰く、頂上に大なる岩あり、その

岩の上に大男三人いたり。前にあまたの金銀をひろげたり。この男の近よるを見て、

気色けしきばみて振り返る、その眼の光きわめて恐ろし。早池峯に登りたるが途みちに迷いて

来たるなりと言え、然らば送りて遣るべしとて先に立ち、麓ふもと近きところまで来た

り、眼を塞ふさげと言うままに、暫時そこに立ちている間に、たちまち異人は見えずな

りたりという。

三〇

小国村おくにの何某という男、或る日早池峯に竹を伐きりに行きしに、地竹じだけのおび

ただしく茂りたる中に、大なる男一人寝ていたるを見たり。地竹にて編みたる三尺

ばかりの草履ぞうりを脱ぬぎてあり。仰あおに臥ふして大なる躰いびきをかきてありき。

○下閉伊郡小国村大字小国。

○地竹は深山に生ずる低き竹なり。

三二 遠野郷の民家の子女にして、異人にさらわれて行く者年々多くあり。ことに女に多しとなり。

三二一 千晩せんばヶ岳だけは山中ぬまに沼あり。この谷は物すごく腥なまぐさき臭かのするところにて、この山に入り帰りたる者はまことに少すくなし。昔何の隼人はやとという獵師あり。その子孫今もあり。白き鹿を見てこれを追ひこの谷に千晩こもりたれば山の名とす。その白鹿撃たれて遁げ、次の山まで行きて片肢かたあし折れたり。その山を今片羽山かたはやまという。さてまた前なる山へきてついに死したり。その地を死助しすけという。死助権現しすけこんげんとて祀まつれるはこの白鹿なりという。

○宛然えんぜんとして古風土記をよむがごとし。

三二三 白望しろみの山に行きて泊とまれば、深夜にあたりの薄明うすあかるくなることあり。秋のころ茸きのこを採りに行き山中に宿きこする者、よくこの事に逢う。また谷のあなたにて大木を伐り倒す音、歌の声など聞きこゆることあり。この山の大きさは測はかるべからず。五月に萱かやを苅きりに行くとき、遠く望めば桐の花の咲き満みちたる山あり。あたかも紫の雲のたなびけるがごとし。されどもついにそのあたりに近づくこと能あたわず。かつて茸を採りに入りし者あり。白望の山奥にて金の槌とと金の杓しゃくとを見たり。持ち帰らんとするにきわめて重く、鎌かまにて片端かたはしを削けずり取らんとしたれどそれもかなわず。また来こんと

思いて樹の皮を白くし栞しおりとしたりしが、次の日人々とともに行きてこれを求めたれど、ついにその木のありかをも見出しえずしてやみたり。

二四 白望の山続はなれもりきに離森こあぜというところあり。その小字に長者屋敷というは、全く無人の境なり。ここに行きて炭を焼く者ありき。或る夜その小屋の垂菰たれごもをかかげて、内を窺うかがう者を見たり。髪を長く二つに分けて垂たれたる女なり。このあたりにても深夜に女の叫び声を聞くことは珍しからず。

三五 佐々木氏の祖父の弟、白望に茸を採りに行きて宿やどりし夜、谷を隔てたるあなたの大きな森林の前を横よぎりて、女の走り行くを見たり。中空を走るように思われたり。待ちちやアと二声ばかり呼よばわりたるを聞けりとぞ。

二六 猿ふつたちの経立おいぬ、御犬おいかみの経立は恐ろしきものなり。御犬とは狼のことなり。山口の村に近ふたき二ツ石山いしやまは岩山なり。ある雨の日、小学校より帰る子どもこの山を見るに、処々ここここの岩の上に御犬うずくまりてあり。やがて首を下より押おしあぐるようにしてかわるがわる吠ほえたり。正面より見れば生うまれ立ての馬の子ほどに見ゆ。後うしろから見れば存外ぞんがい小さしいえり。御犬のうなる声ほど物凄ものすしく恐ろしきものはなし。

三七 境木峠さかいげとうげと和山峠わやまとうげとの間に、昔は駄賃馬だちんばを追う者、しばしば狼に逢いたりき。馬方うまかたらは夜行には、たいてい十人ばかりも群むれをなし、その一人が牽ひく馬は一端綱ひとはづなとてたいてい五六七匹びきまでなれば、常に四五十匹の馬の数なり。ある時二三百ばか

りの狼追ひ来たり、その足音山もどよむばかりなれば、あまりの恐ろしさに馬も人も一所に集まりて、そのめぐりに火を焼きてこれを防ぎたり。されどなおその火を躍り越えて入り来るにより、ついには馬の綱を解きこれを張り回らせしに、奔などなりと思ひけん、それよりのちは中に飛び入らず。遠くより取り囲みて夜の明るまで吠えてありきとぞ。

三八 おとも 小友村の旧家の主人にて今も生存せる某爺という人、町より帰りに頻に御犬の吠ゆるを聞きて、酒に酔いたればおのれもまたその声をまねたりしに、狼も吠えながら跡より来るようなり。恐ろしくなりて急ぎ家に帰り入り、門の戸を堅く鎖して打ち潜みたれども、夜通し狼の家をめぐりて吠ゆる声やまず。夜明けて見れば、馬屋の土台の下を掘り穿ちて中に入り、馬の七頭ありしをことごとく食い殺していたり。この家はそのころより産や傾きたりとのことなり。

三九 佐々木君幼きころ、祖父と二人にて山より帰りしに、村に近き谷川の岸の上に、大なる鹿の倒れてあるを見たり。横腹は破れ、殺されて間もなきにや、そこよりはまだ湯気立てり。祖父の曰く、これは狼が食いたるなり。この皮ほしけれども御犬は必ずどこかこの近所に隠れて見ておるに相違なければ、取ることができぬといえり。

四〇 草の長さ三寸あれば狼は身を隠すといえり。草木の色の移り行くにつれて、

狼の毛の色も季節きせつごとに変りて行くものなり。

四一 和野の佐々木嘉兵衛、或る年境木越さかいげこえの大谷地おおやちへ狩にゆきたり。死助しすけの方より走れる原なり。秋の暮のことにて木の葉は散り尽し山もあらわなり。向うむこうの峯たけより何百とも知れぬ狼此方へ群むれて走りくるを見て恐ろしさに堪えず、樹こすえの梢のぼに上りてありしに、その樹の下を夥おびただしき足音して走り過ぎ北の方へ行けり。そのころより遠野郷には狼甚だ少なくなれりとのことなり。

四二 六角牛山ろっこうしの麓ふもとにオバヤ、板小屋などいふところあり。広き萱山かややまなり。村々より苺かりに行く。ある年の秋飯豊村いいでむらの者ども萱を苺むらるとて、岩穴の中より狼の子三匹を見出し、その二つを殺し一つを持ち帰りしに、その日より狼の飯豊衆いいでしの馬を襲おそうことやまず。外ほかの村々の人馬にはいささかも害をなさず。飯豊衆相談して狼狩おすをなす。その中には相撲すもうを取り平生力自慢へいぜいちからじまんの者あり。さて野に出いでて見るに、雄おすの狼は遠くにおりて来きたらず。雌狼めす一つ鉄という男に飛びかかりたるを、ワツポ口を脱うぎて腕うでに巻き、やにわにその狼の口の中に突き込みしに、狼これを噛かむ。なお強く突き入れながら人を喚よぶに、誰も誰も怖おそれて近よらず。その間に鉄の腕は狼の腹まで入り、狼は苦しまぎれに鉄の腕骨を噛かみ砕くだきたり。狼はその場にて死したれども、鉄も担かつがれて帰り程ほどなく死したり。

○ワツポロは上羽織のことなり。

四三 一昨年の『遠野新聞』にもこの記事を載せたり。上郷村の熊という男、友人とともに雪の日に六角牛に狩に行き谷深く入りしに、熊の足跡を見出でたれば、手分てわけしてその跡を寛め、自分は峯の方を行きしに、とある岩の陰かげより大なる熊此方を見る。矢頃やごろあまりに近かりしかば、銃をすてて熊に抱えつき雪の上を転びて、谷へ下る。連の男これを救わんと思えども力及ばず。やがて谷川に落ち入りて、人の熊下したになり水に沈みたりしかば、その隙ひまに獣の熊を打ち取りぬ。水にも溺れず、爪の傷は数ヶ所受けたれども命に障さわることはなかりき。

四四 六角牛の峯続きにて、橋野はしのという村の上なる山に金坑きんこうあり。この鉾山のため炭を焼きて生計とする者、これも笛の上手じょうずにて、ある日昼の間小屋におり、仰向あおむきに寝転ねころびて笛を吹きてありしに、小屋の口なる垂菰たれづもをかかぐる者あり。驚きて見れば猿の経立ふつたちなり。恐ろしくて起き直りたれば、おもむろに彼方かなたへ走り行きぬ。

○上閉伊郡栗橋村大字橋野。

四五 猿の経立はよく人に似て、女色を好み里の婦人を盗み去ること多し。松脂まつやにを毛に塗ぬり砂をその上につけておる故、毛皮けがわは鎧よろいのごとく鉄砲の弾たまも通らず。

四六 栃内村の林崎に住む何某という男、今は五十に近し。十年あまり前のこと

なり。六角牛山に鹿を撃ちに行き、オキを吹きたりしに、猿の経立あり、これを真まことの鹿なりと思ひしか、地竹じだけを手にて分けながら、大なる口をあけ嶺の方より下り来たれり。胆潰きんつぶれて笛を吹きやめたれば、やがて反それて谷の方へ走り行きたり。

○オキとは鹿笛のことなり。

四七 この地方にて子供をおどす言葉に、六角牛の猿の経立が来るぞということ常の事なり。この山には猿多し。緒袪おがせの滝を見に行けば、崖がけの樹こすえの梢にあまたおり、人を見れば遁にげながら木の実みなどを擲なげうちて行くなり。

四八 仙人峠せんにとうげにもあまた猿おりて行人に戯たわむれ石を打ちつけなどす。

四九 仙人峠は登り十五里降り十五里あり。その中ほどに仙人の像を祀りたる堂あり。この堂の壁かべには旅人がこの山中にて遭いたる不思議の出来事を書き識しるすこと昔よりの習ならいなり。例えば、我は越後の者なるが、何月何日の夜、この山路やまみちにて若き女の髪を垂たれたるに逢えり。こちらを見てにこと笑いたりという類たぐいなり。またこの所にて猿に悪戯いたずらをせられたりとか、三人の盗賊に逢えりというような事をも記しるせり。

○この一里も小道なり。

五〇 死助しすけの山にカツコ花あり。遠野郷にても珍しという花なり。五月閑古鳥かんこどりの

啼くころ、女や子どもこれを採りに山へ行く。酢の中に漬けて置けば紫色になる。酸漿の実のように吹きて遊ぶなり。この花を採ることは若き者の最も大なる遊樂なり。

五一 山にはさまさまの鳥住めど、最も寂しき声の鳥はオット鳥なり。夏の夜中に啼く。浜の大槌より駄賃附の者など峠を越え来たれば、遙に谷底にてその声を聞くとはいえり。昔ある長者の娘あり。またある長者の男の子と親しみ、山に行きて遊びしに、男見えたり。夕暮になり夜になるまで探しあるきしが、これを見つくることをえずして、ついにこの鳥になりたりという。オットーン、オットーンというは夫のことなり。末の方かすれてあわれなる鳴声なり。

五二 馬追鳥は時鳥に似て少し大きく、羽の色は赤に茶を帯び、肩には馬の綱のようなる縞あり。胸のあたりにクツゴコ（口籠）のようなるかたあり。これも或る長者が家の奉公人、山へ馬を放しに行き、家に帰らんとするに一匹不足せり。夜通しこれを求めあるきしがついにこの鳥となる。アーホー、アーホーと啼くはこの地方にて野における馬を追う声なり。年により馬追鳥里にきて啼くことあるは飢饉の前兆なり。深山には常に住みて啼く声を聞くなり。

○クツゴコは馬の口に嵌める綱の袋なり。

五三 郭公かつこうと時鳥ほととぎすとは昔ありし姉妹なり。郭公は姉なるがある時芋いもを掘りて焼き、

そのまわりの堅きところを自ら食い、中の軟かなるところを妹に与えたりしを、妹は姉の食う分ぶんは一層旨うまかるべしと想いて、庖丁ほうちょうにてその姉を殺せしに、たちまちに鳥となり、ガンコ、ガンコと啼きて飛び去りぬ。ガンコは方言にて堅いところということなり。妹さてはよきところをのみおのれにくれしなりけりと思ひ、悔恨に堪えず、やがてまたこれも鳥になりて庖丁ほうちょうかけたと啼きたりという。遠野にては時鳥のことを庖丁かけと呼ぶ。盛岡辺にては時鳥はどちやへ飛んでたと啼くという。

○この芋は馬鈴薯ばれいしょのことなり。

五四 閉伊川へいがわの流れには淵ふち多く恐ろしき伝説少なからず。小国川との落合に近きところに、川井かわいという村あり。その村の長者の奉公人、ある淵の上なる山にて樹を伐るとて、斧おのを水中に取り落したり。主人の物なれば淵に入りてこれを探りしに、水の底に入るままに物音聞ゆ。これを求めて行くに岩の陰に家あり。奥の方に美しき娘機はたを織りていたり。そのハタシに彼の斧は立てかけてありたり。これを返したまわらんとする時、振り返りたる女の顔を見れば、二三年前に身まかりたる我が主人の娘なり。斧は返すべければ我がこの所ところにあることを人にいうな。その礼としてはその方身上しんしょう良くなり、奉公をせずともすむようにして遣やらんといいたり。そのた

めなるか否かは知らず、その後胴引どうびきなどという博奕ばくちに不思議に勝ち続けて金溜りかねたま、ほどなく奉公をやめ家に引き込みちゆうて中ぐらいの農民になりたれど、この男は疾とくに物忘れして、この娘のいいしことも心づかずしてありしに、或る日同じ淵ほとりの辺を過ぎすて町へ行くとて、ふと前の事を思い出し、伴ともなえる者に以前かかることありきと語りしかば、やがてその噂うわさは近郷に伝わりぬ。その頃より男は家産再び傾かたむき、また昔の主人に奉公して年を経たり。家の主人は何と思ひしにや、その淵なんがに何荷なんがともなく熱湯そとを注そそぎ入れなどしたりしが、何の効もなかりしとのことなり。

○下閉伊郡川井村大字川井、川井はもちろん川合の義なるべし。

五五 川には川童かわわらわ多く住めり。猿ヶ石川ことに多し。松崎村の川端かわばたの家にて、二

代まで続けて川童かわわらわの子を孕はらみたる者あり。生れし子は斬きり刻きざみて一升樽いっしょうだるに入れ、土

中に埋うずめたり。その形かたちきわめて醜怪なるものなりき。女の婿むこの里は新張村の何某と

て、これも川端の家なり。その主人人ひとにその始終しじゆうを語れり。かの家の者一同ある日

はたけ

畠はたけに行きて夕方に帰らんとするに、女川の汀みぎわに踞うずくまりてにこにこと笑いてあり。次の

日は昼ひるの休みにまたこの事あり。かくすること日を重ねたりしに、次第にその女のと

ころへ村の何某という者夜々通よるよるかようという噂うわさ立ちたり。始めには婿むこが浜の方だちんづけへ駄賃附

に行きたる留守るすをのみ窺うかがいたりしが、のちには婿むこと寝ねたる夜よるさえくるようになれり。

川童なるべしという評判だんだん高くなりたれば、一族の者集まりてこれを守れどもなんの甲斐もなく、婿の母も行きて娘の側に寝たりしに、深夜にその娘の笑う声を聞きて、さては来てありと知りながら身動きもかなわず、人々いかにともすべきようなかりき。その産はきわめて難産なりしが、或る者のいうには、馬槽に水をたたえその中にて産まば安く産まるべしとのことにて、これを試みたれば果してその通りなりき。その子は手に水掻あり。この娘の母もまたかつて川童の子を産みしことありという。二代や三代の因縁にはあらずという者もあり。この家も如法の豪家にて何の某という土族なり。村会議員をしたることもあり。

五六 上郷村の何某の家にも川童らしき物の子を産みたることあり。確なる証とはなけれど、身内真赤にして口大きく、まことにいやな子なりき。忌わしければ棄てんとてこれを携えて道ちがえに持ち行き、そこに置いて一間ばかりも離れたりが、ふと思ひ直し、惜しきものなり、売りに見せ物にせば金になるべきにとて立ち歸りたるに、早取り隠されて見えざりきという。

○道ちがえは道の二つに別かるところすなわち追分なり。

五七 川の岸の砂の上には川童の足跡というものを見ること決して珍しからず。雨の日の翌日などはことにこの事あり。猿の足と同じく親指は離れて人間の手の跡

に似たり。長さは三寸に足らず。指先のあとは人ののように明らかに見えずといふ。

五八

小鳥瀬川の姥子淵の辺に、新屋の家という家あり。ある日淵へ馬を冷しに行き、馬曳の子は外へ遊びに行きし間に、川童出でてその馬を引き込まんとし、かえりて馬に引きずられて厩の前に来たり、馬槽に覆われてありき。家のもの馬槽の伏せてあるを怪しみて少しあけて見れば川童の手出でたり。村中のもの集まりて殺さんか宥さんかと評議せしが、結局今後は村中の馬に悪戯をせぬという堅き約束をさせてこれを放したり。その川童今は村を去りて相沢の滝の淵に住めりという。

○この話などは類型全国に充満せり。いやしくも川童のおるといふ国には必ずこの話あり。何の故にか。

五九

外の地にては川童の顔は青しというようなれど、遠野の川童は面の色赭きなり。佐々木氏の曾祖母、穉かりしころ友だちと庭にて遊びてありしに、三本ばかりある胡桃の木の間より、真赤なる顔したる男の子の顔見えたり。これは川童なりしとなり。今もその胡桃大木にてあり。この家の屋敷のめぐりはすべて胡桃の樹なり。

六〇

和野村の嘉兵衛爺、雉子小屋に入りて雉子を待ちしに狐しばしば出でて雉

子を追う。あまり憎ければこれを撃たんと思ひ狙いたるに、狐は此方を向きて何ともなげなる顔してあり。さて引金を引きたれども火移らず。胸騒ぎして銃を検せしに、筒口より手元のところまでいつのまにかことごとく土をつめてありたり。

六一 同じ人六角牛に入りて白き鹿に逢えり。白鹿は神なりという言い伝えあれば、もし傷つけて殺すこと能わすば、必ず祟あるべしと思案せしが、名譽の獵人なれば世間の嘲りをいとい、思い切りてこれを撃つに、手応えはあれども鹿少しも動かず。この時もいたく胸騒ぎして、平生魔除けとして危急の時のために用意したる黄金の丸を取り出し、これに蓬を巻きつけて打ち放したれど、鹿はなお動かず、あまり怪しければ近よりて見るに、よく鹿の形に似たる白き石なりき。数十年の間山中に暮せる者が、石と鹿とを見誤るべくもあらず、全く魔障の仕業なりけりと、この時ばかりは猫を止めばやと思いたりきという。

六二 また同じ人、ある夜山中にて小屋を作るいとまなくて、とある大木の下に寄り、魔除けのサンズ繩をおのれと木のめぐりに三回引きめぐらし、鉄砲を豎に抱えてまどろみたりしに、夜深く物音のするに心づけば、大なる僧形の者赤き衣を羽のように羽ばたきして、その木の梢に蔽いかかりたり。すわやと銃を打ち放せばやがてまた羽ばたきして中空を飛びかえりたり。この時の恐ろしさも世の常ならず。前後三たびまでかかる不思議に遭い、そのたびごとに鉄砲を止めんと心に誓い、氏神

に願掛^{がんが}けなどすれど、やがて再び思い返して、年取るまで獵人^{かりうど}の業を棄^すつること能^{あた}わずとよく人に語^{かた}りたり。

六二二 小国^{おくに}の三浦某^{さん}というは村一の金持^{かねもち}なり。今より二三代前の主人、まだ家は貧しくして、妻は少しく魯鈍^{ろどん}なりき。この妻ある日門^{かど}の前を流るる小さき川に沿いて路^{みち}を採^とりに入りしに、よき物少なければ次第に谷奥深く登りたり。さてふと見れば立派なる黒き門^{もん}の家あり。訝^{いぶか}しけれど門の中に入りて見るに、大なる庭にて紅白の花一面に咲き鶏^{にわとり}多く遊べり。その庭を裏^{うら}の方へ廻^{まわ}れば、牛小屋ありて牛多くおり、馬舎^{うまや}ありて馬多くおれども、一向に人はおらず。ついに玄関より上りたるに、その次の間には朱と黒との膳^{ぜん}碗^{わん}をあまた取り出したり。奥の座敷には火鉢^{ひばち}ありて鉄瓶^{てつびん}の湯のたぎれるを見たり。されどもついに人影はなければ、もしや山男の家ではないかと急に恐ろしくなり、駆^かけ出して家に帰^{かへ}りたり。この事を人に語^{かた}れども実^{まこと}と思う者もなかりしが、また或る日わが家のカドに出でて物を洗いてありしに、川上より赤き碗一つ流れてきたり。あまり美しければ拾い上げたれど、これを食器に用いたれば汚^{きたな}しと人に叱^{しか}られんかと思ひ、ケセネギツの中に置きてケセネを量^{はか}る器^{うつわ}となしたり。しかるにこの器にて量り始めてより、いつまで経^たちてもケセネ尽きず。家の者もこれを怪しみて女に問いたるとき、始めて川より拾い上げし由^{よし}をば語^{かた}りぬ。この家はこれより幸運に向い、ついに今の三浦家となれり。遠野にては山中の不思議^{ふしぎ}

なる家をマヨイガという。マヨイガに行き当りたる者は、必ずその家の内の什器家畜何にてもあれ持ち出でて来べきものなり。その人に授けんがためにかかる家をば見するなり。女が無慾にて何ものをも盗み来ざりしが故に、この椀自ら流れて来たりしなるべしといえり。

○このカドは門にはあらず。川戸にて門前を流るる川の岸に水を汲み物を洗うため家ごとに設けたるところなり。

○ケセネは米稗ひえその他の穀物こくもつをいう。キツはその穀物を容るる箱なり。大小種々のキツあり。

六四 金沢村は白望しろみの麓ふもと、上閉伊郡の内にてもことに山奥にて、人の往来する者

少なし。六七年前この村より栃内村の山崎なにかしなる某かかが家に娘の婿を取りたり。この婿実家に行かんとして山路に迷い、またこのマヨイガに行き当りぬ。家のありさま、牛馬雞の多きこと、花の紅白に咲きたりしことなど、すべて前の話の通りなり。同じく玄関に入りしに、膳ぜん椀を取り出したる室あり。座敷に鉄瓶てつびんの湯たぎりて、今まさに茶を煮にんとするところのように見え、どこか便所などのあたりに人が立ちてあるようにも思われたり。茫然ぼうぜんとして後にはだんだん恐ろしくなり、引き返してついに小国おくにの村里に出でたり。小国にてはこの話を聞きて実まじとする者もなかりしが、

山崎の方にてはそはマヨイガなるべし、行きて膳枕の類を持ち来たり長者にならんとて、婿殿むつまのを先に立てて人あまたこれを求めに山の奥に入り、ここに門ありきというところに来たれども、眼にかかるものもなく空しく帰り来たりぬ。その婿もついに金持になりたりということを聞かず。

○上閉伊郡金沢村。

六五 早池峯はやちねは御影石みかげいしの山なり。この山の小国むに向きたる側かわに安倍ヶ城あべがじょうという岩あり。険けわしき崖がけの中ほどにありて、人などはとても行きうべきところにあらず。こには今でも安倍貞任あべのさだとうの母住めりと言ひ伝う。雨あめの降ふるべき夕方など、岩屋いわやの扉とびらを鎖とぎす音聞ゆという。小国つくもうち、附馬牛つくもうしの人々は、安倍ヶ城じょうの錠じようの音がする、明日あすは雨ならんなどという。

六六 同じ山の附馬牛よりの登り口にもまた安倍屋敷あべやしきという巖窟いんくつあり。とにかく早池峯は安倍貞任にゆかりある山なり。小国より登る山口にも八幡太郎はちまんたろうの家来けらいの討死うちじにしたるを埋めたりという塚三つばかりあり。

六七 安倍貞任に関する伝説はこのほかにも多し。土淵村たひちと昔は橋野はしのといいし栗橋村との境にて、山口よりは二三里も登りたる山中に、広く平なる原あり。そのあたりの地名に貞任というところあり。沼ありて貞任が馬ひやを冷せしところなりという。

貞任が陣屋じんやを構えし址かまとも言ひ伝う。景色けしきよきところにて東海岸よく見ゆ。

六八 土淵村には安倍氏という家ありて貞任が末なりという。昔は栄えたる家

なり。今も屋敷やしきの周囲には堀ありて水を通ず。刀劍馬具あまたあり。当主は安倍

与右衛門よえもん、今も村にては二三等の物持ものもちにて、村会議員なり。安倍の子孫はこのほか

にも多し。盛岡の安倍館あべだての附近にもあり。厨川くりやがわの柵しやくに近き家なり。土淵村の安倍家

の四五町北、小鳥瀬川こがらせがわの河隈かわくまに館たての址あり。八幡沢はちまんざの館たてという。八幡太郎が陣屋と

いうものこれなり。これより遠野の町への路みちにはまた八幡山という山ありて、その

山の八幡沢の館の方に向かえる峯やまにもまた一つの館址たてあしあり。貞任が陣屋なりという。

二つの館の間二十余町を隔つ。矢戦やいくさをしたりという言い伝えありて、矢の根を多く

掘り出せしことあり。この間に似田貝にたかいという部落あり。戦の当時このあたりは蘆あしし

げりて土固かたまらず、ユキユキと動揺せり。或る時八幡太郎ここを通りしに、敵味方てきみかた

いずれの兵糧ひょうりょうにや、粥かゆを多く置きてあるを見て、これは煮た粥にかといひしより村の

名となる。似田貝にたかいの村の外を流るる小川を鳴川なるかわという。これを隔てて足洗川あしらがむら村あり。

鳴川なるかわにて義家よしかたが足を洗いしより村の名となるという。

○ニタカイはアイヌ語のニタトすなわち湿地より出しなるべし。地形よく合えり。西の国々にてはニタともヌタともいふ皆これなり。下閉伊郡小川村にも二

田貝という字あり。

六九 今の土淵村には大同という家二軒あり。山口の大同は当主を大洞万之丞とおおほらまんのじょうという。この人の養母名はおひで、八十を超えて今も達者なり。佐々木氏の祖母の姉なり。魔法に長じたり。まじないにて蛇を殺し、木に止れる鳥を落しなどするを佐々木君はよく見せてもらいたり。昨年こぞの旧暦正月十五日に、この老女の語りしには、昔あるところに貧しき百姓あり。妻はなくて美しき娘あり。また一匹の馬を養う。娘この馬を愛して夜になれば厩舎うまやに行きて寝ね、ついに馬と夫婦になれり。或る夜父はこの事を知りて、その次の日に娘には知らせず、馬を連れ出して桑の木につり下げて殺したり。その夜娘は馬のおらぬより父に尋ねてこの事を知り、驚き悲しみて桑の木の下に行き、死したる馬の首に縋すがりて泣きいたりしを、父はこれを悪みて斧をもつて後より馬の首を切り落せしに、たちまち娘はその首に乗りたるまま天に昇り去れり。オシラサマというはこの時より成りたる神なり。馬をつり下げたる桑の枝にてその神の像を作る。その像三つありき。本にて作りしは山口の大同にあり。これを姉神とす。中にて作りしは山崎の在家権十郎という人の家にあり。佐々木氏の伯母が縁づきたる家なるが、今は家絶えて神の行方を知らず。末にて作りし妹神の像は今附馬牛村にありといえり。

七〇 同じ人の話に、オクナイサマはオシラサマのある家には必ず伴ないて在す

神なり。されどオシラサマはなくてオクナイサマのみある家もあり。また家によりて神の像も同じからず。山口の大同にあるオクナイサマは木像なり。山口の辻石たにえという人の家なるは掛軸なり。田圃のうちにいませるはまた木像なり。飯豊の大同にもオシラサマはなけれどオクナイサマのみはいませりという。

七一 この話をしたる老女は熱心なる念仏者なれど、世の常の念仏者とは様かわり、一種邪宗らしき信仰あり。信者に道を伝うことはあれども、互いに嚴重なる秘密を守り、その作法につきては親にも子にもいささかたりとも知らしめず。また寺とも僧とも少しも関係はなくて、在家の者のみの集まりなり。その人の数も多からず。辻石たにえという婦人などは同じ仲間なり。阿弥陀仏の齋日には、夜中人の静まるを待ちて会合し、隠れたる室にて祈祷す。魔法まじないを善くする故に、郷党に対して一種の權威あり。

七二 栃内村の字琴畑は深山の沢にあり。家の数は五軒ばかり、小烏瀬川の支流の水となり。これより栃内の民居まで二里を隔つ。琴畑の入口に塚あり。塚の上には木の座像あり。およそ人の大きさにて、以前は堂の中にありしが、今は雨ざらしなり。これをカクラサマという。村の子供これを玩物にし、引き出して川へ投げ入れまた路上を引きずりなどする故に、今は鼻も口も見えぬようになれり。或いは子供を叱り戒めてこれを制止する者あれば、かえりて祟を受け病むことありといえり。

○神体仏像子供と遊ぶを好みこれを制止するを怒りたもうことほかにも例多し。
 遠江小笠郡大池村東光寺の薬師仏（『掛川志』）、駿河安倍郡豊田村曲金の軍陣坊
 社の神（『新風土記』）、または信濃筑摩郡射手の弥陀堂の木仏（『信濃奇勝録』）
 などこれなり。

七三 カクラサマの木像は遠野郷のうちに数多あり。栃内の字西内にもあり。山
 口分の大洞おおほらというところにもありしことを記憶する者あり。カクラサマは人のこれ
 を信仰する者なし。粗末なる彫刻にて、衣裳頭の飾いしやうかしら かざりのありさまも不分明なり。

七四 栃内のカクラサマは右の大小二つなり。土淵一村にては三つか四つあり。
 いずれのカクラサマも木の半身像にてなたの荒削りあらけずの無恰好なるものなり。されど
 人の顔なりということだけは分わかるなり。カクラサマとは以前は神々の旅をして休
 息したもうべき場所の名なりしが、その地に常つねにいます神をかく唱となうることとなれり。
 七五 離森はなれもりの長者屋敷にはこの数年前まで燐寸マツチの軸木じくぎの工場こうばありたり。その小屋
 の戸口に夜よるになれば女の伺い寄りて人を見てげたげたと笑う者ありて、淋しさに堪
 えざる故、ついに工場を大字山口に移したり。その後また同じ山中まぐらぎきりだに枕木伐出しの
 ために小屋をかけたる者ありしが、夕方になると人夫の者いずれへか迷い行き、帰り
 てのち茫然ぼうぜんとしてあることしばしばなり。かかる人夫四五人もありてその後も絶え

ず何方へか出でて行くことありき。この者どもが後に言うを聞けば、女がきて何処へか連れだすなり。歸りてのちは二日も三日も物を覚えずといえり。

七六 長者屋敷は昔時長者の住みたりし址なりとて、そのあたりにも糠森という山あり。長者の家の糠を捨てたるがなれるなりという。この山中には五つ葉のうつ木ありて、その下に黄金を埋めてありとて、今もそのうつぎの有処を求めあるく者稀々にあり。この長者は昔の金山師なりしならんか、このあたりには鉄を吹きたる滓あり。恩徳の金山もこれより山続きにて遠からず。

○諸国のヌカ塚スクモ塚には多くはこれと同じき長者伝説を伴なえり。また黄金埋蔵の伝説も諸国に限りなく多くあり。

七七 山口の田尻長三郎というは土淵村一番の物持なり。当主なる老人の話に、

この人四十あまりのころ、おひで老人の息子亡くなりて葬式の夜、人々念仏を終りおのおの帰り行きし跡に、自分のみは話好きなれば少しあとになりて立ち出でしに、軒の雨落ちの石を枕にして仰臥したる男あり。よく見れば見も知らぬ人にて死してあるようなり。月のある夜なればその光にて見るに、膝を立て口を開きてあり。この人大胆者にて足にて揺かして見たれど少しも身じろぎせず。道を妨げて外にせん方もなければ、ついにこれを跨ぎて家に歸りたり。次の朝行きて見ればもちろんそ

の跡方あとかたもなく、また誰も外ほかにこれを見たりという人はなかりしかど、その枕にしてありし石の形と在りあどころとは昨夜の見覚えみおぼの通りなり。この人の曰く、手をかけて見たらばよかりしに、半ば恐ろしければただ足にて触れたるのみなりし故、さらに何もののわざとも思いつかずと。

七八 同じ人の話に、家に奉公せし山口の長蔵なる者、今も七十余の老翁にて生存す。かつて夜遊びに出でて遅くかえり来たりしに、主人の家の門は大槌往還に向いて立てるが、この門の前にて浜の方よりくる人に逢えり。雪合羽ゆきがっぱを着たり。近づきて立ちとまる故、長蔵も怪しみてこれを見たるに、往還を隔てて向側なる畠地の方へすつと反それて行きたり。かしこには垣根かきねありしはずなるにと思ひて、よく見れば垣根は正ただしくあり。急に怖ろしくなりて家の内に飛び込み、主人にこの事を語りしが、のちになりて聞けば、これと同じ時刻に新張村にいばりむらの何某という者、浜よりの帰り途みちに馬より落ちて死したりとのことなり。

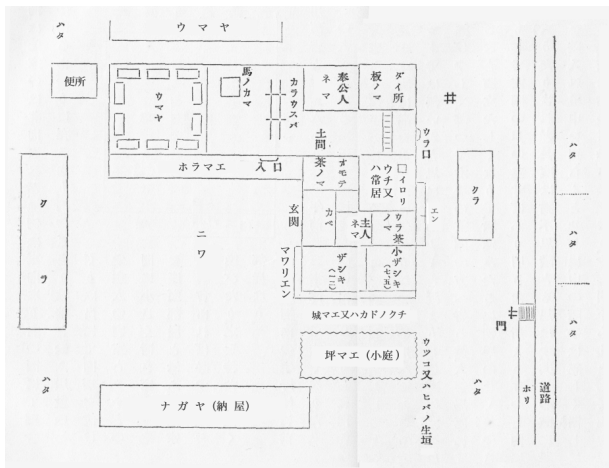
七九 この長蔵の父をもまた長蔵という。代々田尻家の奉公人にて、その妻とともに仕えてありき。若きころ夜遊びに出で、まだ宵よのうちに帰り来たり、門かどの口より入りしに、洞前ほらまえに立てる人影あり。懷手ふところをして筒袖つつそでの袖口を垂れ、顔は茫ぼうとしてよく見えず。妻は名をおつねといえり。おつねのところへ来たるヨバヒトではないかと思ひ、つかつかと近よりしに、奥の方へは遁にげずして、かえつて右手の玄関の方

へ寄る故、人を馬鹿にするなど腹立たしくなりて、なお進みたるに、懷手のまま後
 ずさりして玄関の戸の三寸ばかり明きたるところより、すつと内に入りたり。され
 ど長蔵はなお不思議とも思わず、その戸の隙に手を差し入れて中を探らんとせしに、
 中の障子は正しく閉してあり。ここに始めて恐ろしくなり、少し引き下らんとして
 上を見れば、今の男玄関の雲壁にひたとつきて我を見下すごとく、その首は低く垂
 れてわが頭に触るるばかりにて、その眼の球は尺余も、抜け出でであるように思わ
 れたりという。この時はただ恐ろしかりしのみにて何事の前兆にてもあらざりき。

○ヨバヒトは呼ばい人なるべし。女に思いを運ぶ人をかくいう。

○雲壁はなげしの外側の壁なり。

遠野物語



八〇 右の話をよく呑みこむためには、田尻氏の家のさまを図にする必要あり。

遠野一郷の家の建てかたはいずれもこれと大同小異なり。

門はこの家のは北向きなれど、通例は東向きなり。右の図にて厩舎のあるあたりにあるなり。門のことを城前じやうまえという。屋敷やしきのめぐりは畠はしにて、囲牆いしやうを設けず。主人の寝室とウチとの間に小さく暗き室あり。これを座頭部屋ざとうべやという。昔は家に宴会あれば必ず座頭を喚よびたり。これを待たせ置く部屋なり。

○この地方を旅行して最も心とまるは家の形の何れもかぎの手なることなり。この家などそのよき例なり。

八一 板内の字野崎のざきに前川万吉という人あり。二三年前に三十余にて亡くなりたり。この人も死ぬる二三年前に夜遊びに出でて帰りしに、門かどの口くちより廻り縁えんに沿いてその角かどまで来たるとき、六月の月夜のことなり、何心なく雲壁くもかべを見れば、ひたとこれにつきて寝たる男あり。色の蒼あおざめたる顔なりき。大いに驚きて病みたりしがこれも何の前兆にてもあらざりき。田尻氏の息子丸吉この人と懇親にてこれを聞きたり。

茶ノ間

台
ド
コ
ロ

神
棚
カ
仏
壇

ケ
グ
ラ
座

常
居
又
ハ
ウ
チ

横
座

炉

キ
ン
ス
リ
座

客
座

座
シ
キ

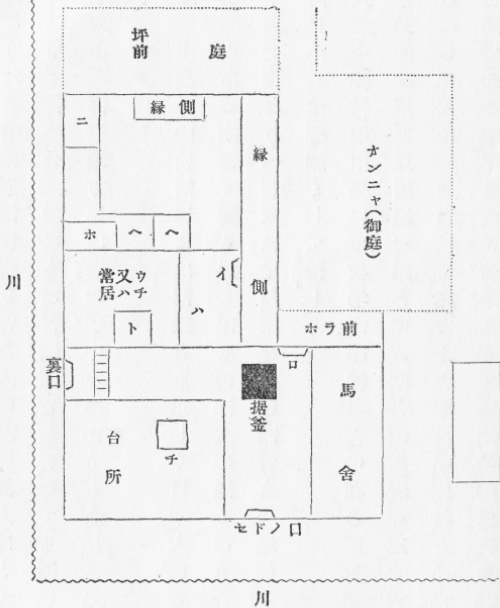
障
子

縁 雨戸 側

八二 これは田尻丸吉という人が自ら遭いたることなり。少年の頃ある夜常居より立ちて便所に行かんとして茶の間に入りしに、座敷との境に人立てり。幽かに茫としてあれど、衣類の縞も眼鼻もよく見え、髪をば垂れたり。恐ろしけれどそこへ手を延ばして探りしに、板戸にがたと突き当り、戸のさんにも触りたり。されどわが手は見えずして、その上に影のように重なりて人の形あり。その顔のところへ手を遣ればまた手の上に顔見ゆ。常居に歸りて人々に話し、行灯を持ち行きて見たれば、すでに何ものもあらざりき。この人は近代的人にて伶俐なる人なり。また虚言をなす人にもあらず。

八三 山口の大同、大洞万之丞の家の建てざまは少しく外の家とはかわれり。その図次のページに出す。玄関は異の方に向かえり。きわめて古き家なり。この家には出して見れば崇ありとて開かざる古文書の葛籠一つあり。

イロハニホヘト
玄関前茶仏寝台
口マノダチウ
所ノンマチノ
姪



八四 佐々木氏の祖父は七十ばかりにて三四年前に亡くなりし人なり。この人の青年のころといえ、^{かえい}嘉永の頃なるべきか。海岸の地には西洋人あまた来住してあ

りき。釜石にも山田にも西洋館あり。船越の半島の突端にも西洋人の住みしことあり。耶蘇教は密々に行われ、遠野郷にてもこれを奉じて磔になりたる者あり。浜に行きたる人の話に、異人はよく抱き合いては嘗め合う者なりなどいうことを、今でも話にする老人あり。海岸地方には合の子なかなか多かりしということなり。

八五 土淵村の柏崎にては両親とも正しく日本人にして白子二人ある家あり。髪も肌も眼も西洋人の通りなり。今は二十六七ぐらいなるべし。家にて農業を営む。語音も土地の人とは同じからず、声細くして鋭し。

八六 土淵村の中央にて役場小学校などのあるところを字本宿という。此所に豆腐屋を業とする政という者、今三十六七なるべし。この人の父大病にて死なんとするころ、この村と小烏瀬川を隔てたる字下柵内に普請ありて、地固めの堂突をなすところへ、夕方に政の父ひとり来たりて人々に挨拶し、おれも堂突をなすべしとて暫時仲間に入りて仕事をなし、やや暗くなりて皆とともに帰りたり。あとにて人々あの人は大病のはずなるにと少し不思議に思いしが、後に聞けばその日亡くなりたりとのことなり。人々悔みに行き今日のことを語りしが、その時刻はあたかも病人が息を引き取らんとするころなりき。

八七 人の名は忘れたれど、遠野の町の豪家にて、主人大煩いして命の境に臨みしころ、ある日ふと菩提寺に訪い来たれり。和尚鄭重にあしらい茶などすすめた

り。世間話せけんばなしをしてやがて帰らんとする様子に少々不審あれば、跡より小僧を見せに遣りしに、門を出でて家の方に向い、町の角かどを廻りて見えずなれり。その道にてこの人に逢いたる人まだほかにもあり。誰にもよく挨拶して常の体つねなりしが、この晩に死去してもちろんその時は外出などすべき様態ようたいにてはあらざりしなり。後に寺にては茶は飲んだりや否やと茶碗を置きしところを改めしに、畳たたみの敷しき合わせへ皆こぼしてありたり。

八八 これも似たる話なり。土淵村大字土淵じようけんじの常堅寺そうとうしゅうは曹洞宗にて、遠野郷十二ヶ寺の触頭ふれがしらなり。或る日の夕方に村人何某という者、本宿もとじゆくより来る路にて何某という老人にあえり。この老人はかねて大病をして居る者なれば、いつのまによくなりしやと問うに、二三日気分も宜よろしければ、今日は寺へ話を聞きに行くなりとて、寺の門前にてまた言葉を掛け合いて別れたり。常堅寺にても和尚はこの老人が訪ね来たりし故出迎ゆええ、茶を進めしばらく話をして帰る。これも小僧に見させたるに門の外そとにて見えずなりしかば、驚きて和尚に語り、よく見ればまた茶は畳の間にこぼしてあり、老人はその日失うせたり。

八九 山口より柏崎へ行くには愛宕山あたごやまの裾すそを廻まわるなり。田圃たんぼに続ける松林にて、柏崎の人家見ゆる辺より雑木ぞうきの林となる。愛宕山の頂いただきには小さき祠ほくらありて、参詣さんけいの路は林の中にあり。登口のぼりぐちに鳥居立とりいち、二三十本の杉の古木あり。その旁かたわらにはまた一

つのがらんとしたる堂あり。堂の前には山神の字を刻みたる石塔を立つ。昔より山の神出づと言ひ伝うるところなり。和野わのの何某なにという若者、柏崎に用事ありて夕方堂のあたりを通りしに、愛宕山の上より降り来る丈高たけき人あり。誰ならんと思ひ林の樹木越しにその人の顔のところを目がけて歩み寄りしに、道の角かどにてはたと行き逢いぬ。先方は思ひ掛けざりしにや大いに驚きて此方を見たる顔は非常に赤く、眼は耀かがやきてかついかにも驚きたる顔なり。山の神なりと知りて後あとをも見ずに柏崎の村に走りつきたり。

○遠野郷には山神塔多く立てり、そのところはかつて山神に逢ひまたは山神の祟を受けたる場所にて神をなだむるために建てたる石なり。

九十

松崎村に天狗森てんぐもりという山あり。その麓くわばたけなる桑畠くわばたけにて村の若者何某という者、

働はたらきていたりしに、頻しきりに睡ねむくなりたれば、しばらく畠の畔くろに腰掛けて居眠りいねむせんとせしに、きわめて大なる男の顔は真赤まっかなるが出で来たれり。若者は気軽へいぜにて平生相撲すもうなどの好きな男なれば、この見馴みなれぬ大男が立ちはだかりて上より見下すようなるを面悪つらにくく思ひ、思わず立ち上りてお前はどこから来たかと問うに、何の答えもせざれば、一つ突き飛ばしてやらんと思ひ、力自慢ちからじまんのまま飛びかかり手を掛けたりと思うや否や、かえりて自分の方が飛ばされて氣を失いたり。夕方に正氣づきてみれ

ば無論その大男はおらず。家に帰りてのち人にこの事を話したり。その秋のことなり。早池峯の腰へ村人大勢とともに馬を曳きて萩を苅りに行き、さて帰らんとするころになりてこの男のみ姿見えず。一同驚きて尋ねたれば、深き谷の奥にて手も足も一つ一つ抜き取られて死していたりという。今より二三十年前のことにて、この時の事をよく知れる老人今も存在せり。天狗森には天狗多くいるということは昔より人の知るところなり。

九一 遠野の町に山々の事に明るき人あり。もとは南部男爵家の鷹匠なり。町の人綽名して鳥御前あだな とりごぜんという。早池峯、六角牛の木や石や、すべてその形状と在処とを知れり。年取りてのち茸採りにとて一人の連つれとともに出でたり。この連の男というは水練の名人にて、藁わらと槌つちとを持ちて水の中に入り、草鞋わらじを作りて出てくるという評判の人なり。さて遠野の町と猿ヶ石川を隔むけつる向山むけやまという山より、綾織村あやおりの続石つづきいしとて珍しき岩のある所の少し上の山に入り、兩人別れ別れになり、鳥御前一人はまた少し山を登りしに、あたかも秋の空の日影、西の山の端より四五間けんばかりなる時刻なり。ふと大なる岩の陰かげに赭あかき顔の男と女とが立ちて何か話をして居るに出逢であいたり。彼らは鳥御前の近づくを見て、手を拡ひろげて押し戻すようなる手つきをなし制止したれども、それにも構かまわず行きたるに女は男の胸に縋すがるようになりたり。事のさまより真の人間にてはあるまじと思ひながら、鳥御前はひょうきんな人なれば戯たわむれ

て遣らんとて腰なる切刃きりばを抜き、打ちかかるようにしたれば、その色赭あかき男は足を挙げて蹴りたるかと思ひしが、たちまちに前後を知らず。連なる男はこれを探しまわりて谷底に氣絶してあるを見つけ、介抱して家に歸りたれば、鳥御前は今日の一部始終を話し、かかる事は今までに更になきことなり。おのれはこのために死ぬかも知れず、ほかの者には誰にもいうなと語り、三日ほどの間病みて身まかりたり。家の者あまりにその死にようの不思議なればとて、山臥やまふしのケンコウ院というに相談せしに、その答えには、山の神たちの遊べるところを邪魔したる故、その祟たたをうけて死したるなりといえり。この人は伊能先生なども知合なりき。今より十余年前の事なり。

九二 昨年のことなり。土淵村の里の子十四五人にて早池峯に遊びに行き、はからず夕方近くなりたれば、急ぎて山を下り麓ふもと近くなるころ、丈の高き男の下より急ぎ足に昇りくるに逢えり。色は黒く眼はきらきらとして、肩には麻かと思わるる古き浅葱色の風呂敷あさいろにて小さき包を負いたり。恐ろしかりしかども子供の中の一人、どこへ行くかと此方より声を掛けたるに、小国おぐにさ行くと答う。この路は小国へ越ゆべき方角にはあらざれば、立ちとまり不審するほどに、行き過ぐると思うまもなく、はや見えずなりたり。山男よと口々に言いてみなみな遁げ歸りたりといえり。

九三 これは和野の人菊池菊蔵という者、妻は笛吹峠のあなたなる橋野より来た

る者なり。この妻親里へ行きたる間に、糸藏という五六歳の男の児病氣になりたれば、ひるす昼過ぎより笛吹峠を越えて妻を連れに親里へ行きたり。名に負う六角牛の峯続きなれば山路は樹深く、ことに遠野分より栗橋分へ下らんとするあたりは、路はウドになりて両方は岨そばなり。日影はこの岨に隠れてあたりやや薄暗くなりたるころ、後の方より菊藏と呼ぶ者あるに振り返りて見れば、崖がけの上より下を覗のぞくものあり。顔は赭く眼の光りかがやけること前の話のごとし。お前の子はもう死んで居るぞという。この言葉を聞きて恐ろしさよりも先にはつと思いたりしが、はやその姿は見えず。急ぎ夜の中に妻を伴ともないて帰りたれば、果して子は死してありき。四五年前のことなり。

○ウドとは両側高く切込みたる路のことなり。東海道の諸国にてウタウ坂・謡坂などいうはすべてかくのごとき小さき切通しのことならん。

九四 この菊藏、柏崎なる姉の家に用ありて行き、振舞ふるまわれたる残りの餅もちを懷ふところに入れて、愛宕山の麓ふもとの林を過ぎしに、象坪ぞうつぼの藤七おやぢのみという大酒呑にて彼と仲善なかよしの友に行き逢えり。そこは林の中なれど少しく芝原しばはらあるところなり。藤七はにこにこしてその芝原を指し、ゆびさここで相撲すもうを取らぬかという。菊藏これを諾し、二人草原にてしばらく遊びしが、この藤七いかにも弱く軽く自由に抱かかえては投げらるる故、面白

きままに三番まで取りたり。藤七が曰く、今日はとてもかなわず、さあ行くべしとて別れたり。四五間けんも行きてのち心づきたるにかの餅見え。相撲場に戻りて探したれどなし。始めて狐ならんかと思いたれど、外聞を恥じて人にもいわざりしが、四五日ののち酒屋にて藤七に逢いその話をせしに、おれは相撲など取るものか、その日は浜へ行きてありしものと言いて、いよいよ狐と相撲を取りしこと露顯したり。されど菊蔵はなお他の人々には包み隠してありしが、昨年こぞの正月の休みに人々酒を飲み狐の話をせしとき、おれもじつはこの話を白状し、大いに笑われたり。

○象坪は地名にしてかつ藤七の名字なり。象坪という地名のこと『石神問答』いしがみんどうの中にてこれを研究したり。

九五 松崎の菊池某という今年四十三四の男、庭作りの上手じょうずにて、山に入り草花を掘りてはわが庭に移し植え、形の面白き岩などは重きを厭いとわず家に担にない帰るを常とせり。或る日少し気分重ければ家を出でて山に遊びしに、今までついに見たることなき美しき大岩を見つけた。平生の道楽なればこれを持ち帰らんといい、持ち上げんとせしが非常に重し。あたかも人の立ちたる形たけして丈もやがて人ほどあり。されどほしさのあまりこれを負い、我慢して十間ばかり歩みしが、気の遠くなるくらい重ければ怪しみをなし、路みちの旁かたわらにこれを立て少しくもたれかかるようにしたるに、

そのまま石とともにすつと空中に昇り行く心地したり。雲より上になりたるように思いしがじつに明るく清きところにて、あたりにいろいろの花咲き、しかも何処ともなく大勢の人声聞えたり。されど石はなおますます昇り行き、ついには昇り切れたるか、何事も覚えぬようになりたり。その後時過ぎて心づきたる時は、やはり以前のごとく不思議の石にもたれたるままにてありき。この石を家の内へ持ち込みてはいかなることあらんも測りがたしと、恐ろしくなりて遁げ帰りぬ。この石は今も同じところにあり。おりおりはこれを見て再びほしくなることありといえり。

九六 遠野の町に芳公馬鹿とて三十五六なる男、白痴にて一昨年まで生きてありき。この男の癖は路上にて木の切れ塵などを拾い、これを捻りてつくづく見つめまたはこれを嗅ぐことなり。人の家に行きては柱などをこすりてその手を嗅ぎ、何ものにも眼の先きまで取り上げ、にこにこしておりおりこれを嗅ぐなり。この男往来をあるきながら急に立ち留り、石などを拾い上げてこれをあたりの人家に打ちつけ、けたたましく火事だ火事だと叫ぶことあり。かくすればその晩か次の日か物を投げつけられたる家火を発せざることなし。同じこと幾度となくあれば、のちにはその家々も注意して予防をなすといえども、ついに火事を免れたる家は一軒もなしといえり。

九七 飯豊の菊池松之丞という人傷寒を病み、たびたび息を引きつめし時、自分

は田圃に出でて菩提寺ぼだいじなるキセイ院へ急ぎ行かんとす。足に少し力を入れたるに、
 図らず空中に飛び上り、およそ人の頭ほどのところを次第に前下りに行き、また少し
 力を入れるれば昇ること始めのごとし。何とも言われず快し。寺の門に近づくに人群
 集せり。何故なにゆえならんと訝いぶかりつつ門を入れ、紅くれないの芥子けしの花咲き満ち、見渡すかぎり
 も知らず。いよいよ心持よし。この花の間に亡なくなりし父立てり。お前もきたのか
 という。これに何か返事をしながらなお行くに、以前失いたる男の子おりて、トツ
 チャお前もきたかという。お前はここにいたのかと言いつつ近よらんとすれば、今
 きてはいけないという。この時門の辺にて騒しくわが名を喚よぶ者ありて、うるさき
 こと限りなけれど、よんどころなければ心も重くいやいやながら引き返したりと思
 えば正氣づきたり。親族の者寄つどり集い水など打ちそそぎて喚よび生いかしたるなり。

九八 路の傍に山の神、田の神、塞さえの神の名を彫りたる石を立つるは常のことな
 り。また早池峯山・六角牛山の名を刻したる石は、遠野郷にもあれど、それよりも
 浜にことに多し。

九九 土淵村の助役北川清という人の家は字火石ひいしにあり。代々の山臥やまぶしにて祖父は
 正福院といい、学者にて著作多く、村のために尽したる人なり。清の弟に福二とい
 う人は海岸の田の浜むしへ婿むこに行きたるが、先年の大海嘯おおつなみに遭いて妻と子とを失い、生
 き残したる二人の子とともに元の屋敷の地に小屋を掛けて一年ばかりありき。夏の

初めの月夜に便所に起き出でしが、遠く離れたところにおいて行く道も浪の打つ渚なり。霧の布きたる夜なりしが、その霧の中より男女二人の者の近よるを見れば、女は正しく亡くなりしわが妻なり。思わずその跡をつけて、遙々と船越村の方へ行く崎の洞あるところまで追い行き、名を呼びたるに、振り返りてにこと笑いたり。男はとみればこれも同じ里の者にて海嘯の難に死せし者なり。自分が婿に入りし以前に互いに深く心を通わせたりと聞きし男なり。今はこの人と夫婦になりてありというに、子供は可愛くはないのかといえ、女は少しく顔の色を変えて泣きたり。死したる人と物いうとは思われずして、悲しく情なくなりたれば足元を見てありし間に、男女は再び足早にそこを立ち退きて、小浦へ行く道の山陰を廻り見えずなりたり。追いかけて見たりしがふと死したる者なりしと心づき、夜明けまで道中に立ちて考え、朝になりて帰ったり。その後久しく煩いたりといえり。

一〇〇 船越の漁夫何某。ある日仲間の者とともに吉利吉里より帰るとて、夜深

く四十八坂のあたりを通りしに、小川のあるところにて一人の女に逢う。見ればわが妻なり。されどもかかる夜中にひとりこの辺に來べき道理なければ、必定化物ならんと思ひ定め、やにわに魚切庖丁を持ちて後の方より差し通したれば、悲しき声を立てて死したり。しばらくの間は正体を現わさざれば流石に心に懸り、後の事を連の者に頼み、おのれは馳せて家に帰りしに、妻は事もなく家に待ちてあり。今恐

ろしき夢を見たり。あまり帰りの遅ければ夢に途中まで見に出でたるに、山路にて何とも知れぬ者に脅かされて、命を取らるると思ひて目覚めたりという。さてはと合点して再び以前の場所へ引き返してみれば、山にて殺したりし女は連の者が見ておる中について一匹の狐となりたりといえり。夢の野山を行くにこの獣の身を備うことありと見ゆ。

一〇一 旅人豊間根村を過ぎ、夜更け疲れたれば、知音の者の家に灯火の見ゆるを幸に、入りにて休息せんとせしに、よき時に来合せたり、今夕死人あり、留守の者なくていかにせんかと思ひしところなり、しばらくの間頼むといひて主人は人を喚びに行きたり。迷惑千万なる話なれど是非もなく、囲炉裡の側にて煙草を吸いてありしに、死人は老女にて奥の方に寝させたが、ふと見れば床の上にむくむくと起き直る。胆潰れたれど心を鎮め静かにあたりを見廻すに、流し元の水口の穴より狐のごとき物あり、面をさし入れて頻に死人の方を見つめていたり。さてこそと身を潜め窃かに家の外に出で、背戸の方に廻りて見れば、正しく狐にて首を流し元の穴に入れ後足を爪立てていたり。有合せたる棒をもてこれを打ち殺したり。

○下閉伊郡豊間根村大字豊間根。

一〇二 正月十五日の晩を小正月という。宵のほどは子供ら福の神と称して四五

人群を作り、袋を持ちて人の家に行き、明の方から福の神が舞い込んだと唱えて餅を貰う習慣あり。宵を過ぐればこの晩に限り人々決して戸の外に出づることなし。小正月の夜半過ぎは山の神出でて遊ぶと言ひ伝えてあればなり。山口の字丸古立におまさという今三十五六の女、まだ十二三の年のことなり。いかなるわけにてか唯一人にて福の神に出で、ところどころをあるきて遅くなり、淋しき路を帰りしに、向うの方より丈の高き男来てすれちがいたり。顔はすてきに赤く眼はかがやけり。袋を捨てて遁げ帰り大いに煩いたりといえり。

一〇三 小正月の夜、または小正月ならずとも冬の満月の夜は、雪女が出でて遊ぶともいう。童子をあまた引き連れてくるといえり。里の子ども冬は近辺の丘に行き、櫓遊びをして面白さのあまり夜になることあり。十五日の夜に限り、雪女が出るから早く帰れと戒めらるるは常のことなり。されど雪女を見たりという者は少なし。

一〇四 小正月の晩には行事甚だ多し。月見というは六つの胡桃の実を十二に割り一時に炉の火にくべて一時にこれを引き上げ、一列にして右より正月二月と数うるに、満月の夜晴なるべき月にはいつまでも赤く、曇るべき月には直に黒くなり、風ある月にはフーフーと音をたてて火が振うなり。何遍繰り返しても同じことなり。村中いづれの家にも同じ結果を得るは妙なり。翌日はこの事を語り合い、例えば八月の十五夜風とあらば、その歳の稲の刈入を急ぐなり。

○五穀の占、月の占多少のヴァリエテをもつて諸国に行なわる。陰陽道おんようどうに出でしものならん。

一〇五 また世中よなかみ見というは、同じく小正月の晩に、いろいろの米にて餅をこしらえて鏡となし、同種の米を膳ぜんの上に平たいらに敷き、鏡餅かがみもちをその上に伏せ、鍋なべを被かぶせ置きて翌朝これを見るなり。餅につきたる米粒こめつぶの多きものその年は豊作なりとして、早中晩の種類を扱ひ定むるなり。

一〇六 海岸の山田にては蜃気楼しんきろう年々見ゆ。常に外国の景色なりという。見馴みなれぬ都のさまにして、路上の車馬しげく人の往来眼ざましきばかりなり。年ごとに家の形などいささかも違うことなしといえり。

一〇七 上郷村に河ぶちのうちという家あり。早瀬川の岸にあり。この家の若き娘、ある日河原に出でて石を拾いてありしに、見馴みなれぬ男来たり、木の葉とか何とかを娘にくれたり。丈高たけく面朱しゆのような人なり。娘はこの日より占うらなひの術を得たり。異人は山の神にて、山の神の子になりたるなりといえり。

一〇八 山の神の乗り移りたりとて占をなす人は所々にあり。附馬牛村つくもうしにもあり。本業は木挽こびきなり。柏崎の孫太郎もこれなり。以前は発狂して喪心したりしに、ある日山に入りて山の神よりその術を得たりしのは、不思議に人の心中を読むこ

と驚くばかりなり。その占いの法は世間の者とは全く異なり。何の書物をも見ず、頼みにきたる人と世間話をなし、その中にふと立ちて常居じょういの中をあちこちとあるき出すと思うほどに、その人の顔は少しも見ずして心に浮びたることをいうなり。当らずということなし。例えばお前のウチの板敷いたじきを取り離し、土を掘りて見よ。古き鏡または刀の折れあるべし。それを取り出さねば近き中に死人ありとか家が焼くるとかいうなり。帰りて掘りて見るに必ずあり。かかる例は指を屈するに勝たえず。

一〇九 盆のころには雨風祭とて藁わらにて人よりも大なる人形にんぎょうを作り、道の岐ちまたに送り行きて立つ。紙にて顔を描えがき瓜うりにて陰陽の形を作り添えなどす。虫祭の藁人形にはかかることはなくその形も小さし。雨風祭の折は一部落の中にて頭屋とうやを拵えらび定め、里人集まりて酒を飲みてのち、一同笛太鼓ふえたいこにてこれを道の辻まで送り行くなり。笛の中には桐きりの木にて作りたるホウなどあり。これを高く吹く。さてその折の歌は「二百十日の雨風まつるよ、どちの方さ祭る、北の方さ祭る」という。

○『東国輿地勝覧よち』によれば韓国にても厲壇れいだんを必ず城の北方に作ること見ゆ。ともに玄武神の信仰より来たれるなるべし。

一一〇 ゴンゲサマというは、神楽舞の組かぐらまいごとに一つずつ備われる木彫の像にし、獅子頭ししがしらとよく似て少しく異なれり。甚だ御利生ごりしょうのあるものなり。新張の八幡社きばり

の神楽組のゴンゲサマと、土淵村字五日市いっかいちの神楽組のゴンゲサマと、かつて途中にて争いをなせしことあり。新張のゴンゲサマ負けて片耳かたみみを失いたりとて今もなし。毎年村々を舞いてあるく故、これを見知らぬ者なし。ゴンゲサマの靈験れいげんはことに火伏ひふせにあり。右の八幡の神楽組かつて附馬牛村に行きて日暮ひぐれ宿を取り兼ねしに、ある貧しき者の家にて快くこれを泊とめて、五升ます榲すを伏せてその上にゴンゲサマを座すえ置き、人々は臥ふしたりしに、夜中にながつと物を噛かむ音のするに驚きて起きてみれば、軒端のきばたに火の燃えつきてありしを、榲すの上なるゴンゲサマ飛び上り飛び上りして火を喰くい消してありしなりと。子どもの頭を病む者など、よくゴンゲサマを頼み、その病を噛かみてもらうことあり。

一一一 山口、飯豊、附馬牛の字荒川東禅寺および火渡ひわた、青笹の字中沢ならびに土淵村の字土淵に、ともにダンノハナという地名あり。その近傍にこれと相對して必ず蓮台野れんだいのという地あり。昔は六十を超えたる老人はすべてこの蓮台野へ追い遣るならいの習なりありき。老人はいたずらに死んで了しまうこともならぬ故に、日中は里へ下り農作して口を糊ぬちしたり。そのために今も山口土淵辺にては朝あしたに野らに出づるをハカダチといい、夕方野らより帰ることをハカアガリというといえり。

○ダンノハナは壇の塙なるべし。すなわち丘の上にて塚を築きたる場所ならん。

境の神を祭るための塚なりと信ず。蓮台野もこの類なるべきこと『石神問答』中にいえり。

一一一 ダンノハナは昔館たてのありし時代に囚人を斬きりし場所なるべしという。地形は山口のも土淵飯豊のもほぼ同様にて、村境の岡の上なり。仙台にもこの地名あり。山口のダンノハナは大洞おおほらへ越ゆる丘の上にて館址たてあしよりの続きなり。蓮台野はこれと山口の民居を隔てて相対す。蓮台野の四方はすべて沢なり。東はすなわちダンノハナとの間の低地、南の方を星谷という。此所には蝦夷屋敷えぞやしきという四角に凹へこみたところ多くあり。その跡あときわめて明白なり。あまた石器を出す。石器土器の出るところ山口に二ヶ所あり。他の一は小字こあざをホウリヨウという。ここの土器と蓮台野の土器とは様式全然殊ことなり。後者のは技巧いささかもなく、ホウリヨウのは模様もようなども巧たくみなり。埴輪はにわもここより出づ。また石斧石刀の類も出づ。蓮台野には蝦夷銭えぞせんとて土にて銭の形をしたる径二寸ほどの物多く出づ。これには単純なる渦紋うずもんなどの模様あり。字ホウリヨウには丸玉・管玉くだたまも出づ。ここの石器は精巧にて石の質も一致したるに、蓮台野のは原料いろいろなり。ホウリヨウの方は何の跡ということもなく、狭き一町歩いちちようぶほどの場所なり。星谷は底の方かた今は田となれり。蝦夷屋敷はこの両側に連なりてありしなりという。このあたりに掘れば崇たありという場所二ヶ所ほどあり。

○外の村々^{ほか}にても二所の地形および関係これに似たりという。

○星谷という地名も諸国にあり星を祭りしところなり。

○ホウリヨウ権現は遠野をはじめ奥羽一円に祀らるる神なり。蛇の神なりという。名義を知らず。

一一三 和野にジヨウツカ森というところあり。象を埋めし場所なりといえり。此所だけには地震なしとて、近辺にては地震の折はジヨウツカ森へ遁げよと昔より言い伝えたり。これは確かに人を埋めたる墓なり。塚のめぐりには堀あり。塚の上には石あり。これを掘れば祟^{たた}りありという。

○ジヨウズカは定塚、庄塚または塩塚などとかきて諸国にあまたあり。これも境の神を祀りしところにて地獄のシヨウツカの奪衣婆^{だつえば}の話などと関係あること『石神問答』に詳^{つまじ}にせり。また象坪などの象頭神とも関係あれば象の伝説^{よし}は由なきにあらず、塚を森ということも東国の風なり。

一一四 山口のダンノハナは今は共同墓地なり。岡の頂上にうつ木を栽^うえめぐらしその口は東方に向かいて門口^{もんぐち}めきたるところあり。その中ほどに大なる青石あり。かつて一たびその下を掘りたる者ありしが、何ものをも発見せず。のち再びこれを

試みし者は大なる瓶かめあるを見たり。村の老人たち大いに叱しかりければ、またもとのまになし置きたり。館たての主の墓なるべしという。此所に近き館の名はボンシヤサの館という。いくつかの山を掘り割りて水を引き、三重四重に堀を取り廻めぐらせり。寺屋敷・砥石森といしもりなどという地名あり。井の跡とて石垣残れり。山口孫左衛門の祖先ここに住めりという。『遠野古事記』とおのこじきに詳かなり。

一一五 御伽話おとぎばなしのことを昔々むかしむかしという。ヤマハハの話最も多くあり。ヤマハハは山姥やまうばのことなるべし。その一つ二つを次に記すべし。

一一六 昔々あるところにトトとガガとあり。娘を一人持てり。娘を置きて町へ行くとて、誰がきても戸を明けるなと戒しめ、鍵を掛けて出でたり。娘は恐ろしければ一人炉にあたりすくみていたりしに、真昼間まひるまに戸を叩きてここを開けと呼ぶ者あり。開かずば蹴破けやぶるぞと嚇おどす故に、是非なく戸を明けたれば入りきたるはヤマハハなり。炉の横座よこざに踏みはたかりて火にあたり、飯をたきて食わせよという。その言葉に従い膳ぜんを支度してヤマハハに食わせ、その間に家を遁のがげ出したるに、ヤマハハは飯を食い終りて娘を追いかたり、おいおいにその間あいだ近く今にも背せなに手の触ふるばかりになりし時、山の蔭かげにて柴しばを苅る翁に逢う。おれはヤマハハにぼっかけられてあるなり、隠かくしてくれよと頼み、苅り置きたる柴の中に隠れたり。ヤマハハ尋ね来たりて、どこに隠れたかと柴たばの束をのけんとして柴かかを抱えたるまま山より滑すべり落ち

たり。その隙に^{ひま}ここを遁^{のが}れてまた萱^{かや}を苅る翁に逢う。おれはヤマハハにぼっかけられてあるなり、隠してくれよと頼み、苅り置きたる萱の中に隠れたり。ヤマハハはまた尋ね来たりて、どこに隠れたかと萱の束をのけんとして、萱を抱えたるまま山より滑り落ちたり。その隙にまたここを遁れ出でて大きな沼の岸に出でたり。これよりは行くべき方^{かた}もなければ、沼の岸の太木の梢に昇^{のぼ}りいたり。ヤマハハはどけえ行つたとて遁^{のが}がすものかとて、沼の水に娘の影の映^{うつ}れるを見てすぐに沼の中に飛び入^いりたり。この間に再び此所を走り出で、一つの笹小屋^{ささこや}のあるを見つけ、中に入^いりて見れば若き女いたり。此にも同じことを告げて石の唐櫃^{からうど}のありし中へ隠してもらいたるところへ、ヤマハハまた飛び来たり娘のありかを問えども隠して知らずと答えたれば、いんね来ぬはずはない、人くさい香がするものという。それは今雀^{すずめ}を炙^{あぶ}つて食^{ゆえ}つた故^{ゆえ}なるべしと言え、ヤマハハも納得^{なつとく}してそんなら少し寝^ねん、石のからうどの中にしようか、木のからうどの中がよいか、石はつめたし木のからうどの中^{かぎ}にと言いて、木の唐櫃の中に入りて寝たり。家の女はこれに鍵^{かぎ}を下^{おろ}し、娘を石のからうどより連れ出し、おれもヤマハハに連れて来られたる者なればともどもにこれを殺して里へ帰らんとて、錐^{きり}を紅く焼きて木の唐櫃の中に差し通したるに、ヤマハハはかくとも知らず、ただ二十日鼠^{はつかねずみ}がきたと言えり。それより湯を煮^に立てて焼錐^{やききり}の穴^{そと}より注^{そそ}ぎ込みて、ついにそのヤマハハを殺し二人ともに親々の家に帰^{かへ}りたり。

昔々の話の終りはいずれもコレデンドハレという語をもつて結ぶなり。

一一七

昔々これもあるところにトトとガガと、娘の嫁に行く支度を買いに町へ出で行くとて戸を鎖し、誰がきても明けるなよ、はアと答えたれば出でたり。昼のころヤマハハ来たりて娘を取りて食い、娘の皮を被り娘になりておる。夕方二人の親歸りて、おりこひめこ居たかと門の口より呼べば、あ、いたます、早かつたなしと答え、二親は買い来たりいろいろの支度の物を見せて娘の悦ぶ顔を見たり。次の日夜の明けたる時、家の鶏羽ばたきして、糠屋の隅ツ子見ろじや、けけろと啼く。はて常に変りたる鶏の啼きようかなと二親は思いたり。それより花嫁を送り出すとてヤマハハのおりこひめこを馬に載せ、今や引き出さんとするときまた鶏啼く。その声は、おりこひめこを載せなえでヤマハハのせた、けけろと聞ゆ。これを繰り返して歌いしかば、二親も始めて心づき、ヤマハハを馬より引き下して殺したり。それより糠屋の隅を見に行きしに娘の骨あまた有りたり。

○糠屋は物おきなり。

一一八

紅皿欠皿の話も遠野郷に行なわる。ただ欠皿の方はその名をヌカボという。ヌカボは空穂のことなり。継母に悪まれたれど神の恵ありて、ついに長者の妻となるといふ話なり。エピソードにはいろいろの美しき絵様あり。折あらば詳しく

書き記すべし。

一一九 遠野郷の獅子踊ししおどりに古くより用いたる歌の曲あり。村により人によりて少

しずつの相異あれど、自分の聞きたるは次のごとし。百年あまり以前の筆写なり。

○獅子踊はさまでこの地方に古きものにあらず。中代これを輸入せしものなることを人よく知れり。

橋ほめ

一 まゐり来て此橋このを見申みもうせや、いかなもをざは踏ふみそめたやら、わだるがく
かいぎるもの

一 此御馬場このおんばばを見申せや、杉原七里すぎはらななり大門おおもんまで

門かどほめ

一 まあり来て此このもんを見申せや、ひの木さわらで門かど立てゝ、是これぞ目出めでたい白
かねの門

一 門もんの戸こびらおすひらき見申せや、あらの御せだい

○

一 まあり来てこの御本堂を見申せや、いかな大工だいこくは建てたやら
一 建てた御人おひとは御手とから、むかしひたのたくみの立てた寺也なり

小島ぶし

一 小島ではひの木さわらで門かど立てゝ、是ぞ目出めでたい白金しろかねの門

一 白金の門戸かどびらおすひらき見申せや、あらの御おせだい

一 八むねつ棟むねちくりにひわだぶきの、上かみにおひたるから松

一 から松のみぎり左ひだりに涌わくいぢみ、汲めども呑のめどもつきひざるもの

- 一 あさ日さすよう日かゞやく大寺也、さくら色のちごは百人
一 天からおづるちよ硯水、まつて立たれる

馬屋ほめ

- 一 まあり来てこの御台所見申せや、め釜を釜に釜は十六
一 十六の釜で御代たく時は、四十八の馬で朝草苅る
一 その馬で朝草にききやう小萱を苅りませて、花でかゞやく馬屋なり
一 かゞやく中のかげ駒は、せたいあがれを足がきする



- 一 此庭に歌のぞうじはありと聞く、あしびながらも心はづかし
一 われくはきによならひしけふあすぶ、そつ事ごめんなり
一 しやうち申せや限なし、一礼申して立てや友だつ

榊形ほめ

- 一 まゐり来てこの櫓を見申せや、四方四角櫓形の庭也ます
一 まゐり来て此宿を見申せや、人のなさげの宿と申やんこ
もうす

町ほめ

- 一 参り来て此お町を見申せや、豎町十五里横七里、△△出羽にまよおな友たつまい
○出羽の字もじつは不明なり。たてまち

けんだんほめ

- 一 まゐり来てこのけんだん様を見申せや、御町間中にはたを立前さま
一 まいは立町油町たてまちあぶらまち
一 けんだん殿は二かい座敷に昼寝すて、銭を枕に金の手遊ぜに
一 参り来てこの御札見申せば、おすがいろぢきあるまじき札ふだ
一 高き処は城と申し、ひくき処は城下と申す也ところ
しろ
しようか

橋ほめ

一 まあり来てこの橋を見申せば、こ金の辻がね つじに白金のはし

上ほめ

一 まあり来てこの御堂おどう見申せや、四方四面くさび一本

一 扇おうぎとりすぐ取り、上かみさ参らばりそうある物

○すぐは数珠じゆず、りそうは利生か。

家ほめ

一 こりばすらに小金こがねのたる木に、水のせ懸がくるぐしになみたち

○こりばすら文字不分明。

浪合 なみあい

一 此庭に歌の上^{じやう}ずはありと聞く、歌へながらも心はづかし

一 おんげんべりこおらいべり、山と花^こごさは是の御庭へさらゝすかれ

○雲縹縁、高麗縁なり。

一 まぎゑの台に玉のさかすきよりすゑて、是の御庭へ直し置く

一 十七はちやうすひやけ御手^{おて}にもちをすやく廻^{まわし}や御庭かゝやく

一 この御酒^{ごしゆ}一つ引受^{ひきうけ}たもるなら、命長くじめうさかよる

一 さかなには鯛^{たい}もすゞきもござれ共^{ども}、おどにきこいしからのかるうめ

一 正^{しょう}ち申や限なし、一札申て立や友たつ、京^{みやこ}

柱懸り

一 仲だぢ入れやや仲入れろ、仲たづなけれや庭はすんげないゝ

一 すかの子は生れておりれや山めぐる、我等も廻^{まわ}る庭めぐるゝ

○すかの子は鹿の子なり。遠野の獅子踊の面は鹿のようなり。

一 この御庭におい柱の立つときは、ちのみがき若くなるものゝ

○ちのみがきは鹿の角磨つのみがきなるべし。

一 松島の松をそだてゝ見どすれば、松にからするちたのえせものゝ

○ちたは薦つた。

一 松島の松にからまるちたの葉も、えんが無なれやぶろりふぐれるゝ

一 京で九貫のから絵のびよぼ、三よへにさらりたてまはす

○びよぼは屏風びよふぶなり。三よへは三四重か、この歌最もおもしろし。

めずとぐり

一 仲たち入れろや仲入れろ、仲立なけれや庭すんげなえゝ

○めずとぐりは鹿の妻つま扱あつかひなるべし。

一 鹿の子は生れおりれや山廻る、我らもめぐる庭を廻るなと
一 女鹿めじかたづねていかんとして白山はくさんの御山かすみかゝるゝ

○して、字はしめべてとあり。不明

一 うるすやな風はかすみを吹き払て、今こそ女鹿あけてたちねるゝ
○うるすやなはうれ嬉しやななり。

一 何と女鹿はかくれてもひと村すゝきあけてたつねるゝ

一 笹ささのこのは女鹿めじし子は、何とかくてもおひき出さる

一 女鹿大鹿ふりを見ろ、鹿の心みやこなるものゝ

一 奥のみ山の大鹿はことすはじめておどりでそろそろき候ゝ

一 女鹿とらてあうがれて心ちくすくをろ鹿かなと

一 松島の松をそだてゝ見とすれば松にからまるちたのえせものゝ

一 松島の松にからまるちたの葉も、えんがなけれやぞろりふぐれるゝ

一 沖ちゆうのと中の浜す鳥、ゆらりこがれるそろりたつ物ゝ

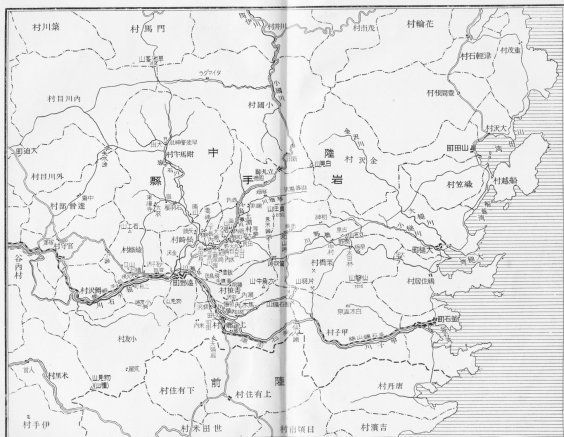
なげくさ

- 一 なげくさを如何いかな御人おひとは御出おいであつた、出た御人は心ありがたい
- 一 この代よを如何いかな大工は御指さしあた、四つ角かどて宝遊たからあそびばしゝ
- 一 この御酒を如何な御酒おほだと思し召めす、おどに聞きいしが、菊きくの酒さけゝ
- 一 此この錢ぜにを如何な錢ぜにたと思し召めす、伊勢お八やちまち錢熊野参くまのまいりの遣つかひあまりかゝ
- 一 此紙このしを如何な紙しと思し召めす、はりまだんぜかかしま紙しか、おりめにそたひ遊あそはし

○播磨檀紙はりまだんしにや。

一 あふぎのお所いぢくなり、あふぎの御所三内の宮、内てすめるはかなめなりゝ、おりめにそたかさなる

○いぢくなりはいずこなるなり。三内の字不明。仮かりにかくよめり。



後註

- 一 ページの左右中央
- 二 ここから33字詰め
- 三 ここで字詰め終わり

底本：「遠野物語・山の人生」岩波文庫 岩波書店

1976（昭和 51）年 4 月 16 日第 1 刷発行

2007（平成 19）年 10 月 4 日第 47 刷改版発行

2010（平成 22）年 3 月 5 日第 50 刷発行

※図版は、「遠野物語増補版」郷土研究社、1935（昭和 10）年 7 月 31 日発行からとりました。

入力：Nana ohbe

校正：阿部哲也

2012 年 12 月 16 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。